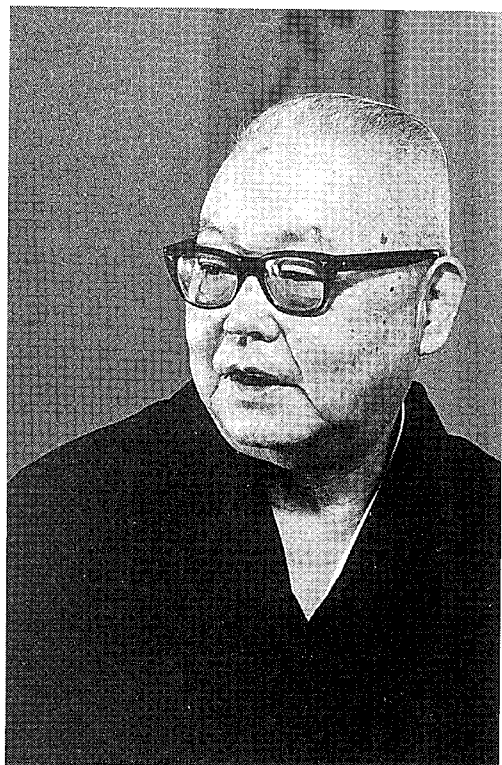


小田原史談

第 154 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20

井伏鱒二さんと伊奈半左衛門



新潮社『井伏鱒二自選全集』より

井伏鱒二さんが伊奈半左衛門の資料を捜しているという記事が、毎日新聞の夕刊に載ったので、早速『二宮尊徳全集』第十四巻に載る「酒匂川大口堤沿革史」のコピーをお送りしたことがある。

『展望』という総合雑誌に載っていた「遙拝隊長」を読んでからのことである。おかしみを漂わせながら悲しみを伴ったその内容に思わず吸い込まれたことを覚えている。

大作家ゆえ、返事など期待していなかったところ、思いがけもなく丁寧な礼状が送られてきた。

貴翰有難く拝見しました。仰せの尊徳全集第十四巻は小田原市の図書館で閲覧しましたが足柄の文化特集号は未見です。いずれまた図書館へ行きますので見せてもらひたいと思ひます。

伊奈家のことは初代二代はわかりませんがあとがわからないので須走や御殿場に行つてぼつぼつノートをとつてゐます。土地の人も割合に知つてゐないのでノートは進みません。

封筒の消印をみると、46・11・25とあり、昭和四十六年(一九七二)十一月のことになる。

昨日迄は代官の最高位にあつた人が、今は罪人として、しかも極悪人を入れる唐丸籠で送られる羽目となつた。

当時『二宮尊徳全集』全三十六巻は、まだ復刻されておらず、井伏さんといえども所蔵されておられないだろうと思ひ、勤め先の高校の蔵書を複写して、お送りしたのである。

だが、村民たちは、かわり合ひを恐れて、見送りしようとする者が一人もいなかった。伝えには見送る人が三人あるにはあつた、という。いよいよ半左衛門は、護送されて足柄峠を越えるとき、御厨地方を見下ろして、

『足柄の文化』というのは、山北町地方史研究会の機関誌、その第四号(一九七〇年二月)で富士宝永噴火を特集している。

玉露と消えてゆく身は惜まねど心にかかる御厨の里と詠んだ。

伊奈家は、関東代官(関東地方の幕領を支配する代官)を代々承継してきた。半左衛門は世襲号で、井伏さんがとりあげようとしたのは、伊奈半左衛門忠順であつた。

半左衛門の処罰は、閉門謹慎、ついで中追放となつた。中追放は島流しになるのが原則で、いわば無期懲役である。半左衛門は、島に送られる前、熟慮の後、割腹自害し果てた。ときに正徳二年(一七三三)二月二十九日、四十六歳のときであつた。

伊奈忠順は、宝永四年(一七二七)十一月富士山が大噴火後の、翌五年閏正月七日、幕命により被災地である

以上は、『史実と伝説―富士山麓

の巻』(静岡市松尾書店刊)の「宝永の大噴火と伊奈半左衛門の業績」に載る内容である。

井伏さんは、この『史実と伝説』を読み、伊奈半左衛門をとりあげようと、調査を開始されることになる。

※

駿東郡久保村(小山町吉久保)では、慶応三年(一八六七)半左衛門を神格化し伊奈神社を創建、最近では、御殿場市農業協同組合前に、彼の銅像が建立されている。

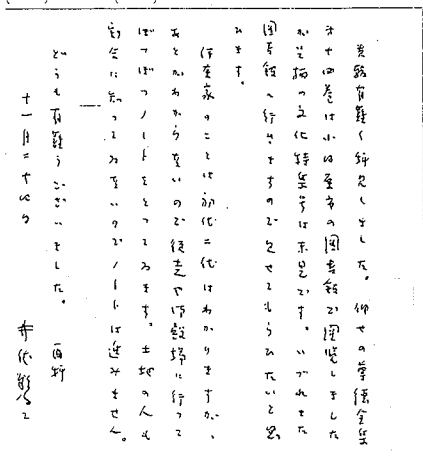
飢饉に直面した農民は、駿東郡の村むらに備蓄食糧を放出した伊奈忠順を、伊奈様さまと神の如く仰ぎみに違いない。

ところが、足柄上・下両郡の被災地の村むらでは、そうではない。

むしろ逆に受けとめてきた記述に「酒匂川大口堤沿革史」がある。その当否は別として、このような見方もあると、井伏さんに、そのコピーをお送りした。それを抄録すると、

来(宝永五年)正月十八日より

御領所に被仰付、伊奈半左衛門様御支配に罷成……御普請は二月十六日迄仕舞……御普請御奉行伊奈半左衛門様御宿は酒匂(小田原市)名主団右衛門様、川通へ三日に巻度御廻り、御手代萩原寛左衛門様、遠山郡太夫様栗田六太夫様此御宿は岸村(山北町)幾石衛門其外御手伝様方(酒匂川は)西大井(小田原市)より酒匂迄、小川は押切川、中



小田原市立図書館蔵
井伏野矢蔵
十一月二十一日

村川(以上小田原市)、皆瀬川(山北町)、内山川(南足柄市)、下請にて川浚ひ、川は所々により二丈三丈四五丈も高く成候故同廿二日満水にて岩流瀬、大口(南足柄市)押切、田畑、家屋敷押埋申候。此度は御老中井上河内守様訴状、龍口(江戸)にて大勢にて差上申候故、半左衛門様は御切腹(筆者傍忠)

御手代、元々役、役人衆は御役替

さらに、井伏さんに、伊奈家の家譜のことをお知らせしたら、再びご返事をいただいた。

再啓

御手紙と切抜を拝見しました。重ねての御教示有難う存じます。仰せの「史実と伝説」は須走の旅館で見せてもらいました。須走で数人の物識りから聞いた話では半左衛門忠順は偉大な郡代であったといふことでした。しかし小田原の人の話では、必ずしもさうではなかったといふことでした。忠順のことは「徳川実記」にも割愛してあるので幕府は伏せて置いたのではないかと思ひます。とにかく大体の見当つけなくてはいけないので小田原図書館を中心に調べるつもりです。年内にと思つてゐましたが仕事の都合で来年にのびします。正月中に出かけるつもりです。

御多忙の折からいろいろ御手数数をかけて相済みません。有難くお禮申し上げます。 不
十二月一日夜

井伏さんが、小田原図書館で調べられたのは、一、二日程度のものかと思ひこんでいたら、そうではなかつた。

た。十日もかけておられたのである。井伏さんは、そのことを「下曾我の御隠居」の中に書かれている。

一昨々年であつたか、私が寶永噴火のことを調べるため、小田原図書館へ十日ばかり通つてゐたことがあつた。尾崎君が図書館の人からそれを聞いて、もし私が図書館に来たら下曾我の尾崎のところへ電話するようにと傳言があつた。それで電話すると、尾崎君が私を一日だけの賓客として迎へ、國府津驛前の國府津館といふ料亭に連れて行つてくれた。

「下曾我の御隠居」とは言わずもがな尾崎一雄氏のこと。尾崎さんの風貌を写真した追憶文章をコマ切れにして、井伏さんの文を殺してしまひ申し訳ないが、それにしても、十日間も小田原図書館に通われるとは想像もしなかつた。

伊奈半左衛門が無断で駿府の米倉を開いた罪で唐丸籠で江戸に送られた、というのは史実ではない。また、半左衛門が大口堤決潰で責任をとらされた、というのも史実ではない。

それにしても、半左衛門への評価は、同じ小田原藩領であっても、相模国足柄上・下両郡と駿河国駿東郡とでは国境一つ越えると全く異ると

は、それが史実でなくても面白いことだ。

駿東郡小山町吉久保の伊奈神社を合祀する水神社には、伊奈忠順の頌徳碑がある。

この碑は、忠順の遺徳を永く子孫に伝えようと、大正三年(一九一四)三月、地元十八カ村民(小山町)の協力により建立された。篆額は徳川家達、撰文は徳富蘇峰である。

このことについて、以下は小山町岩田稻夫氏著『富士山麓に史跡を探る』(昭和五十九年刊)による。

碑文には、忠順は、自分の独断で幕府の米倉を開いて、窮民に施しをしたために役職を罷免された。

そして忠順は、江戸に召還される途中、箱根山を越えるとき、はるかかに御厨の地を顧みて、「あゝ予は懲戒処分を受けたが、岳麓五十九カ村の人々は祖先の霊を墳墓の地に安すんずることが出来た」といった。この言葉を聞いて涙を流さぬ者はいなかった。と、いう意味のことが漢文で書かれている。

また、蘇峰は、忠順の頌徳碑が建立された頃、国民新聞紙上で忠順の功績を讃え称揚している。

これがために、忠順は独断で駿府の蔵米一万三千石を一粒も残さずに窮民に放出した科により処罰された、人々の間でいわれるようになった。

蘇峰が忠順のことを知ったのは、大正二年(一九一三)の夏、青龍寺(御

殿場市)に仮寓、あちこちの史跡を訪ねて歩くうち、一人の古老から話を聞いてからである(撰文にその旨記されている)。

その古老とは、吉久保(小山町)の渡辺丹治であった。

それは、丹治が六十七歳で没するすこし前に遺した「伊奈半左衛門翁仁徳略記」と、蘇峰の撰文と内容が一致しており、撰文の出典は「仁徳略記」であるのが分ったからである。

ところが、「仁徳略記」に疑念を抱いて綿密に調査研究したのが、丹治の長男渡辺誠道であった。

誠道は、伊奈忠順には、御役罷免の記録のないことを発見すると、忠順が従五位に贈位されたのを期に、大正六年(一九一七)七月『贈位欽仰録』を著した。

それによると、忠順は、宝永六年(一七五九)に「相州見分御用」を仰せつけられ、二年後の正徳元年には朝鮮使節の御用掛に就き、翌二年二月二十九日に病死した。しかし、子の忠辰が幼少のために忠達を養子に迎えた。

このように、忠順の罷免は、真実でないことが実証されているのに拘らず、なおも、これを世人が信じるのは頌徳碑の撰文が文豪のものであるからで、「弘法にも筆の誤り」と、岩田稻夫氏は「伊奈半左衛門忠順公の碑文」を結んでいる。

ところで、井伏さんは『贈位欽仰

録』を手にする機会がなかったに違いない。この書が復刻されたのは、昭和六十年四月のことになる。

おそらく、井伏さんは、忠順についての話が史実なのか伝説なのか、その見極めに沈潜されたに違いない。

結局、井伏さんは伊奈半左衛門について書くことを断念された。ぎりぎり一杯史実を追求され、そのうえで、話を展開されようとしたに違いない。

井伏さんの文学に対する厳しい姿勢を垣間見る感じである。

なお、新田次郎氏は、伊奈忠順にまつわる話を小説として井伏さんが調査された二年後の、昭和四十九年三月『怒る富士』(文芸春秋社)を出版された。新田氏も、井伏さんと同じく小田原図書館で調べており、忠順の評判が、足柄上・下郡方面ではあまりよくないのを気にしながらも、その死を異常なものとして、駿東郡被災地復興と結びつけて書かれている。最後にもう一つつけ加えよう。

それは、本間清利氏はその『関東郡代』(昭和五十二年三月埼玉新聞社刊)で次のように述べられている。

当時(元禄から宝永年間にかけて)、幕府の政治路線は、將軍の側用人、のちの大老柳沢吉保と、幕府の財政を一手に握っていた荻原重秀の二人によって推進されていた。

このような状況の中にあつて、忠順は、実力者荻原重秀と常に手を組んで、幕政上重要な役割を担っている。

例えば、元禄十一年(一六九六)三月の永代橋の架橋や、同年六月の深川洲崎海岸の石垣築造など江戸の中心部と結ぶ架橋や海岸の護岸工事・埋立工事によって、

木所・深川地区の市街化を計った。また、宝永元年(一七〇四)十月には利根川・荒川の治水のための浚渫普請を行った。さらには、宝永五年(一七〇八)四月、富士山噴

火による小田原藩領の復旧作業がある。これらは、忠順の手腕が優れていたためではあるが、それよりも、むしろ伊奈家累代の「民治機能」とくに土木普請に対処できる機能」によるところが多い。

ところが、忠順が正徳二年(一七一一)月に急逝したとき、忠順に嫡男忠辰がおりながら、伊奈忠次三代目貞長の次男忠達を養子に迎えて家を継がせているという不審点がある。この事については、

忠順の富士山被災地復興の遅延を責められた罷免説があらわれているが、別の理由によるものではなからうか。

それは、五代將軍綱吉の下で権勢を誇った柳沢吉保が、綱吉が没した翌年の(一七〇六)六月、隠居を命じられ、代わって幕府の実権を間部詮房と新井白石が握った。正徳二年(一七一一)九月、荻原重秀が勘定奉行を罷免され、重秀と関係が深かった銀座の年寄が罰せられている。終始重秀と行動を共にしてきた忠順は、それで幕府から何等かの措置を受けたのではなからうかと、本間清利氏を見る。

なお、この稿を記すに当たっては、内田清氏に、史料の提供や助言を受けましたことに厚く御礼申し上げます。

(岡部忠夫)

小田原叢談(四)

石井富之助

私の家の年中行事

年中行事はむかしは古い家ならたいがいどこでもやっていたと思うが、士族と平民とは違っていたであろうし、農工商漁業それぞれその職業に即した行事を持っていたにちがいない。

わたしの家は明治になってから呉服商を開業したのであるから、そう古い店とはいえないが、年中行事などは店を出した時に新しく作るというようなものではなく、多分、江戸時代から続いている店のまねをしたといつてよいと思う。したがって、わたしの家の年中行事をしるしておけば、むかしの商店の年中行事とおよそこんなものだったぐらいいの見当はつくであろう。

さて、わたしの家ではどんなぐあいに行っていたかというと、実は昭和十九年に母に教えてもらったメモ

- このメモを引用しながら、元日から順にするしていくことにしよう。
- 一月一日 早朝若水をくむ。うがいちようずの後、御幸の浜へ行き、初日の出を拝し、帰途、松原神社、報徳二宮神社へ参けい。
- 一日から三日まで、朝、神棚と仏壇へ雑煮を供える。
- | | |
|-------|----|
| 大神宮 | 一対 |
| 年神 | 一対 |
| 福神 | 一対 |
| ほうそう神 | 一膳 |
| 諸国神々 | 一膳 |
| 荒神 | 一膳 |
| 床の間 | 一膳 |

仏壇 一膳
神棚へは生餅、仏壇へは焼餅とする。別に神棚へかしら付き二尾を供える。
お供え餅も右と同じで、床の間を除き三日の夜全部を下げる。

朝、一家全部が正月用の塗膳、塗椀で雑煮を祝う。雑煮膳にはしらがとごまめを並べた小皿とかつの木箸をつける。

雑煮は、大根、里芋、ほうれん草を入れ、のり、かつおぶしをかけて食べる。里芋は包丁を入れず丸のまままで食べられる程度の小芋を用いる。

ゆずぶろに入り、晴れ着を着た後、一同とそを祝う。とそは最年少者から始め、最年長者でおわる。とそ膳、口取、吸物。

番頭には羽織、着物、帯、下駄等を、小僧には着物、帯、下駄等をおしきせとして与える。

昼、煮しめ、なます、きんぴら、黒豆、数の子、ごまめ、口取等。

夜、三か日まで、神棚、仏壇へおせちを供える。父は大稻荷神社へ参り、とそがすんだ後、毎年きまつわたしをつれて川崎大師へ初もうでに行つた。

店の者は大みそかの片付けが、元日の二時、三時になるので朝はゆっくりである。それが起きてきて、いざ雑煮ということになるとたいへんである。十二人ばかりの血気盛んな者がいっぺんに食べるのだから、普通では餅焼きがととも間に合わない。それで朝早くか

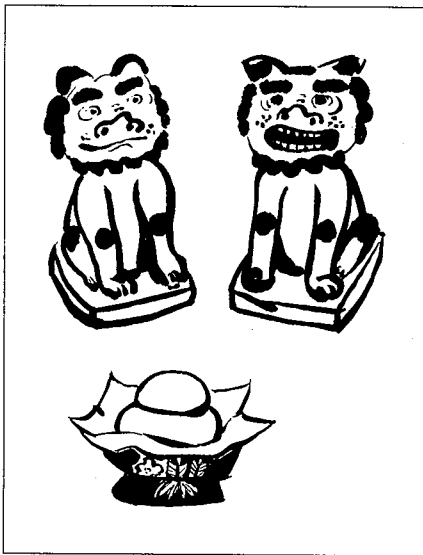
らとび職の者が二人来て、祖父が考案したという直徑四、五十センチの特別な餅焼火鉢で焼く。

店の者はそのあとでおしきせを着てとそを祝う。それからがまた一と仕事で、暮れに注文を受けた年始の手拭やふろしきを折って袋に入れる仕事はまだ残っている。大戸をおろしてあるから、外から見ると休んでいるように見えるが、中は目のまわるような忙しきであった。それもどうやら夕方までに片付けて、夜になってようやく葺、将棋、花札、百人一首ということになる。これが毎年おきまりの元日風景であった。

一月二日 初荷。

朝、雑煮、夜、仕出し屋からどんぶり物をとって一回で食べる。

二日は初荷なので、朝早くから店を開ける。この日にはちょっと変わったことがある。それは、上郡の松田の奥の寄や秦野などからおばあさん連中が買物に出ているのである。おばあさんといっても、子供だったわたしの目にそう映ったのであって、実は四十、五十



カット 内田美枝子

の年配の人だったのである。朝暗いうちに起きて歩いてくるのだから、だいたいうちに着くのが十時ごろになる。めいめい大根やにんじん、落花生などをしょってくる。これはわたしの家へのみやげなのである。

このおばあさん連中、十二時ごろまであれこれと半分の買物をする。そこで昼飯を出すのであるが、かれこれ二十人にもなったであろうか。昼飯をすますと、この人たちは松原神社から浜の方をひとまわりしてきて、二時ごろ買った荷物をしょって帰って行く。この人たちはまたお盆にもくる。一年に二度だけだが、毎年

のことなのですっかり仲がよくなくて、待ったり待たれたりしたものである。今とちがって実になごやかな商売であった。

夜、どんぶり物をとるのは、ずっと働ぎづめの女連中に少しは休んでもらおうという配慮であつたらしい。

一月三日
朝、雑煮。三か日のうち一夜とろろを食べる。
三日からは、店を開けていても暇になり、夜は早くから大戸を下ろし、あとは

自由に遊べるので、どうやら正月らしくなる。
三か日のうちにとろろをどうして食べるのかは残念ながら聞きもらした。

一月四日
六日まで夜おせちを供える。

一月六日
夜、おせちを供える前に、七草をたたく。新しいまな板の上に七草を細かにきざんだものをのせ、すべて新調の包丁、すりこぎ、大菜箸、しゃもじ、金のしゃくしなどを取りかえ、取りかえ、つぎのうたをうたいながらたたく。
なんなく七草
唐土の鳥が
日本の國に
渡らぬさきに
あわせてカッタカタ

一月七日
朝、門松をとり、神の松、さかきと取りかえる。
七草を神棚の前でもう一度たたき、七草がゆを作り、神佛に供えた後一同で食べ

る。
一月十一日
蔵開き。お供えを割り、朝しるこを作る。
一月十四日
親だんご二つを最も上に

さし、宝船やまゆ玉などの形に作っただんご、小さいみかんなどをさして餅花をかざる。

夜、おせち。
一月十五日

朝、あずきがゆを神へ供えた後、神の松、お飾りを取り、氏神へたき上げに行く。餅花のだんごをいっしょに持って行って焼く。歯痛のまじないになるといふ。あずきがゆは少量とって

おいて、十八日の朝、神へ供える。
一月十四日——十六日
松原神社祭典。やぶ入り。
一月十七日
旧須藤町錦織神社小祭。

一月十八日
朝、あずきがゆの残りを神に供える。
一月二十三日
板橋地藏尊へ参けい。

寒中
寒のうちに寒餅をつく。これはもつぱらかき餅、ひなあられなどにする。
初寅(はつとら)
新年はじめてのとらの日に、水の尾の毘沙門天へ参けい。
甲子(きのえね)
一年を通じてきのえねの日には福神をまつ。茶飯、

のっぺいじる、駄菓子などを供え、夜食とする。

二月一日
次郎正月。あずき餅を神前に供える。

節分
豆まき。煮しめ、なます

を作り、夜、おせちを供える。
初午(はつうま)
神前へ赤の御飯を供え、またいなりずしを作る。

秦野の白笹稲荷へ参けい。家にはなかつたが、お稲荷さんをまつてある家では、赤飯、すしを作って近所の子供を集め、祭太鼓をたたいて、お祭りをやった。

二月八日
八日節句。むしつじる(あずき、芋、大根、ごぼう、にんじん、焼き豆腐などの味噌汁)を作る。

三月二日
宵節句。ひなにそばを供える。
三月三日
桃の節句。ひなへ白酒、ひし餅、あられ、重話を供える。

朝、雑煮。にしめ、ねぎぬた。夜、口取、すし。
重話はひな道具の小さい重箱を使い、中につめる口取りなどはひな板その他す

べて小振りに、かわいらしく作り、子供たちや子供の客に一つずつ与える。

ひな納め
天気の良い日に、そばまたはうどんを供えた後、ひなをしまう。
彼岸(ひがし)

おはぎを作り、だんご八つとともに寺へ持って行き、墓参りする。

おはぎは親戚、隣家などに配る。
四月八日
花祭り。
草餅、白のだんごをあずきでくるみ、これを持って寺へ参けい。

五月四日
宵節句。そばを供える。
五月五日
端午の節句。赤飯、にしめ、すし等を作り、かしわ餅とともに供える。しょうぶ湯に入る。ひな納めは三月と同じ。

五月四日、五日
氏神大稲荷神社祭典。
五月七日
錦織神社小祭。

七月七日
たなばた祭り。
(続)

やがて消え去る 戦中戦前派世代が おくる言葉(その二)

高田 喜久三

仕方なかったとは？

今春、小田原で発刊された『語りつたえよう戦時下の小田原』と言う本の中に、戦後生まれの女性が次のように書いています。

何故戦争なんかしたのときくと、仕方なかったんだと大人は答える。

何故戦争が起ったか？

仕方なかったというしくみを批判的に説明するところが戦争を学ぶことだと考えました。

と。確かにその通りです。事実戦中戦前派の私もおそらく同様な答えをしたでしょう。考えてみると今まで何故仕方がなかったかを具体的に説明してくれた人は多くありません。みんな口では国の為だから、君のためだからとゴマ化してしまう癖に、ホントに本心からそう信じた人は数少ない。憲兵が恐いから、特高がくるから、村八分になるから仕方がなかったと言訳する

のです。

しかし、厳密にいうと誰しも忠君はいずれにしても、国の為愛するわが祖国を護る為に参戦したことは真実です。誤った形での愛国心、祖国愛はどうして生まれたのでしょうか。それは明治以来の皇国皇民教育の結果からだと思えます。言葉を替えれば天皇制国家のゆえです。

私たち戦中戦前派は小学校教育の段階から、日本は万世一系の皇国であると教えられました。天照大神が祖神で、あとは代々の天皇がこの国を治めよとの、古事記の神話をそのままに押しつけられました。児童たちは神話をうのみにしませんでした。が、すべての小学教育のルールはその神話から始まったのでした。

しかし、歴史を調べてみますと、皇統は確かに曲りなりにも続いてきました。が、天皇家が日本の国政権を握ったのは、飛鳥奈良朝だけです。この時代は天皇家の権威で徴税し、とくに東国の農民を強制的に徴募して兵

役につかせました。万葉集に詠われる防人などがそうです。ところが政権が京都に移って平安

朝期になると、藤原氏が天皇家の外戚となって政権を握り独裁政治を行いました。しかし、源頼朝が鎌倉に幕府をつくり、征夷大將軍として日本の軍事力を掌握、さらに守護地頭等地方官の任命権も得て、幕府は完全に京都政権と縁が切れました。天皇家は今の言葉で言う単なる象徴となったのです。それ以来建武の中興期に僅か二三年の間天皇が親政をしたあとは、南北朝の紛争となりましたが、その後戦国時代を経て信長、秀吉そして家康と日本の軍事力、政治の権力はおよそ八百年も武士階級の手に移ったのでした。ことに秀吉の天下統一と共に兵農分離が行われて武士を除く農工商は被支配階級として、いわゆる生かさず殺さず、依らしむべし知らしむべからずの時代が永く続くのです。

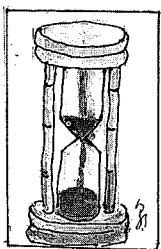
した明治維新を踏まえて、天皇家の権威を藉りて国民の信を得ようとした。そのためには皇国思想を徹底教育して、国民を天皇制国家に組みこまねばなりません。天皇を神格化し、明治憲法は冒頭に「天皇は神聖にして侵す可からず」と書かれました。明治政府の要路の人々は天皇を道具に使ったと言っている。のち美濃部達吉博士が「天皇機関説」によってこれを正当化したのですが、明治

草創期の要路者が亡くなった大正、昭和に入ると皇国思想は独り歩きをはじめ、折角西欧近代思想流入によって勃興した民衆の大正デモクラシーも強力に弾圧されて衰亡し、かわって明治草創期の秘密を知らない軍部官僚が天皇制、皇国思想を盾にして専制をふるうようになったのです。軍部勢力は満州事変を起こし、つづいて日中事変そして遂に太平洋戦争へ突入してしまっただけです。ことに明治憲法に欠落したいわゆる「統帥権」の威力を利用して軍部官僚は思うままに独裁者となったのでした。かくして私たち国民は目を塞がれ耳を掩われたまま戦争への道を軍部政権の言うままに仕方なく十五年間の戦争の道を行ってきたのです。何故それに反抗しなかったかと戦後生まれの人々は指摘するでしょう。しかし世

界の情報を全く失った私たちにとって、政府が言う、満洲中国は日本の生命線という言葉は真に受けて信じたのです。もちろん心ある人はそれに反論しましたが、いづれも軍部によって抹殺されました。

明治以来の天皇制皇国思想は戦中戦前派の人間にとって不信を抱きながらも、反論することが出来なかったのです。君のためとは思いませんでした。が国のための一言は古い人間にとって抵抗し難い重みがありました。皇民教育の徹底化は、国とは何か、この戦争はホントは誰のためのかを考えるヒマを与えませんでした。

しかも国民の多くは、この戦争は絶対に負けることはないと思っていました。むずかしい事ですが今に神風が吹くと、果敢ない望みを誰もが胸に抱いていたことは事実です。今のよう日本歴史の実態を教えられなかった当時の国民にとってそれが最後の夢だったのでしょうか。私はいま歴史の真実を追求することが如何に大切であるかを痛感しております。



古墳遍歴 (十一)

知られざる皇陵 (五)

飯田 悟郎

岡宮天皇陵

岡宮天皇(オカミヤノテ
ンノウ)と呼ばれている方
は、ご歴代には含まれてい
ませんから、あるいはご存
じない方もありましようが、
天皇の尊号は死後の追贈で
ありまして、天武天皇の皇
太子であり、また文武天皇
の父君でもあられた草壁皇
子(クサカベノミコ、別名ヒ
ナメシノミコ)のことであ
る、と申し上げればおわか
りでしょうか。

大海人皇子(後の天武天
皇)と皇妃鷓野讚良(ウノ
ノササラ、一説にウノノサラ
ラ、後の持統天皇)との嫡子
に生まれたため、持統天皇
に偏愛され、闊達にして資
質ゆたかく、文武両道にす
ぐれ、次代の天皇として将
来を嘱望されていた大津皇
子(母は天智天皇の皇女、持
統天皇の同母姉太田皇女)に
あらぬ謀反の疑いをかけて
までして死を賜い、ようや

く皇儲にたてられたものの
生来病弱であり、二十八歳
の若さで死没され、僅か七
歳の遺児輕皇子(カルノミ
コ、後の文武天皇)の成人ま
で、持統天皇が諸政を総覧
するという異例の事態となっ
たことは、よくご存じであ
りましよう。

とまれ、この方の御陵は
眞弓丘陵(マユミノオカノミ
ササギ)と呼ばれ、奈良県
高取町に所在し、近鉄橿原
神宮前駅で吉野線に乗り替
えて三つめ、壺阪山駅で下
車、高取町役場の横を通り、
高取中学校を右に見て北に
転じ、佐田の部落に向かっ
てその入口、左手の小高い
処にある春日神社の境内に
あります。

この辺りは所謂明日香巡
りのコースからは少し外れ
ていて、訪れる人も多くあ
りませんが、道に迷う事も
なく行き着けると存じます。
しかし、この御陵に詣で
ると分かるのですが、これ

を御陵と見てよいかどうか、
少し疑問が生じます。

皇陵らしく威厳を付けた
玉垣に囲まれてはいるもの
の、御陵自体は可愛らしい
小型の円墳で、もっともら
しくしつらえられた環境と、
岡宮天皇陵であることを示
す宮内庁の表示板がなければ、
ここにもあそこにもあ
るただの小さな古墳としか
いいようがありません。

一時は高松塚古墳の被葬
者ではないか、と騒がれた
ほど華やかな過去の持ち主
である草壁皇子の御陵を、
何故このようななさやかな
墳丘に比定したのか分から
ないのですが、実は、近年
の検証によって他に二つ、
岡宮天皇陵たるに相応しい
ものが発見されています。

一つは、同じ佐田の部落
のどんづまり、一番おくの
高い石段を登った明神様の
境内にある束明神(ツカミヨ
ウジン)古墳。もう一つは
佐田の部落とは北に低い山
一つを隔てますが、明日香
村地之窪に所在するマルコ
山古墳がそれでして、いず
れも天皇陵たるに相応しい
規模と、地の利と、たたず
まいをもち、実際に発掘に
より解明された事柄も、そ

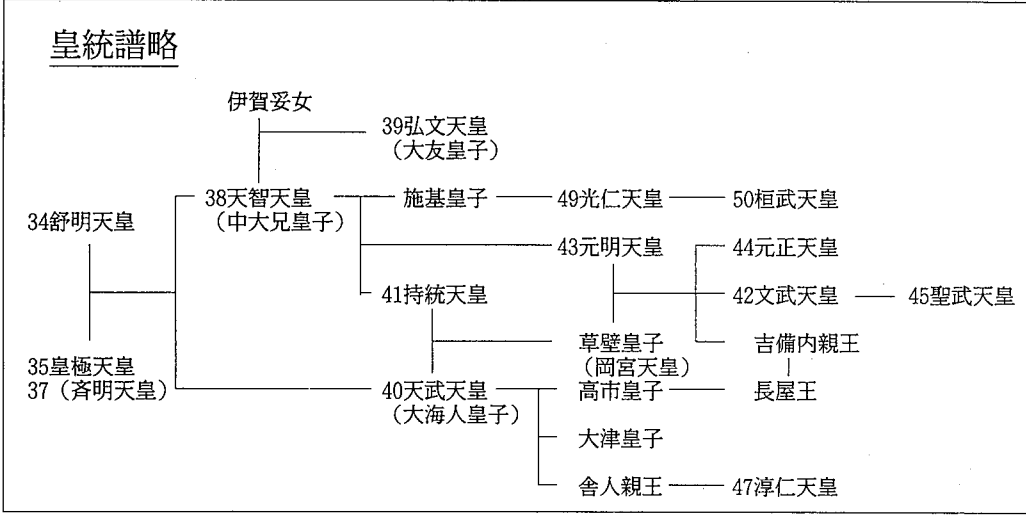
れを裏付けるに足るもので
ありません。

束明神古墳は既述の佐田
の部落の奥にあり、マルコ
山古墳は近鉄吉野線明日香
駅でおりに南に下り、奈良
県立高取
高校を左
に見て地
之窪の部
落の中ほ
ど、右手
の高台に
あります。

双方と
もかなり
削平され
てはいる
ものの、
どっしり
とした構
えは中々
のもので、
どちらが
どちらと
も云えま
せんので、
ご自分で
直接行か
れて見聞
されるこ
とをおす
すめしま
す。

此の頃

の皇室の系譜は大変複雑に
入り組んでいて一寸分り
にくいので、末尾に關係す
る処だけの簡略な皇統譜を
添えておきました。ご参考
まで。(統)



別堀・東学寺の

寅薬師さま

とみた ち はる
富田 千春

(一) 寅薬師さんの概略

大正の初め頃、私が小学生時代に毎月のご命日の夜、母親に連れられて隣村である別堀の寅薬師さんに、よくお参りに行った。命日は月の始めの寅の日だったでしょう。薄暗いお堂にはお燈明が上っており、お参りした帰り近くの菓子屋さんに寄って銀杏飴等を買って貰うのが楽しかった。

薬師堂は今東学寺境内に在るが『新編相模国風土記稿』には、本尊の寅薬師琉璃光如来様は、もと東学寺の末寺であった寅王山東光寺の本尊仏で享徳三年(二聖)に了貞(首座)和尚が開山で、東学寺の西隣りに在り、行基菩薩の作と伝えられる。

(二) 新薬師堂建立

前の薬師堂は戦後間もない昭和二十五年に建てられたが、老朽化が進み時勢の流れに添って、信徒の内から改築の議が起り、檀徒並に一般から浄財勸募により、計画は順調に進み、平成四年五月着工、十一月八日上棟式。今年、平成五年四月十一日、東学寺笠龍桂住

職のもと、寺院方二十余名出席、白象の稚児行列、御詠歌講、一般檀信徒、近郊の善男善女数百名にのぼる落慶法要が盛大に厳肅に挙行された。新寅薬師堂の顔、大工のたくみも技のさえる唐破風造りの向拝、花絵の折上格天井、新厨子も荘厳で華麗な仕上りである。

(三) 薬師信仰

お医者さんや、薬がすぐ間に合はない昔の人は、病の苦痛は仏様にお願するより外に方法がなかった時代、お薬師さんはその名のとおり、救いの仏様であり、来世の往生を願いながら、一方現世の利便をはかってくれる仏さまを祈ることは頷づける。

天武天皇が即位九年(六

二)に皇后の病氣平癒のため、薬師寺建立を発願されたり、平安、鎌倉時代の仏教の中心地、比叡山延暦寺の中心の根本中堂の御本尊が薬師如来である事を見るにつけ、薬師さまの信仰の根強さはうなずける。

人間の病氣、苦しみを救って下さる有難い仏様は今も変わらず、新薬師堂建立は意義深いと思います。

(四) 別堀の東学寺

臨濟宗建長寺派元光山東学禅寺

大正から昭和、私の子供の頃から、この地域の史蹟めぐりに、その先生に一緒にさせて貰った時には必ずと言っていい程に東学寺に立ち寄った。泉史の権威者武相学園の石野瑛先生、鎌倉国宝館長の八幡義生氏、そして中野敬次郎会長で数回は訪れている。江戸初期の作の涅槃図、旧墓地にあっただかくれキリシタンの墓石、昨年県の重文に指定された異色の本尊釈迦如来像等である。

(五) 木造釈迦如来立像

釈迦牟尼仏の像は色々あるが、東学寺本尊は清涼寺式釈迦像で、この地方には極めて珍しい仏像である。清涼寺は京都市右京区嵯峨にあり、奮然(ちょうねん)が入宋し台州で九八五年作らせ、翌年持ち帰った三國伝来の瑞像釈迦といわれ、頭部は螺髪でなく大きく巴に巻く巻縄状に彫られ、袈裟は流波状衣紋の通肩法衣

で、胎内には絹製の五臓六腑などの模形が入っている生身釈迦の霊像といわれている。昭和四十五年十二月市の重文に指定されているが、県文化財審議委員仏像調査団が来山、綿密に調査し贊嘆をうけ、ここで県重要文化財へと格上げされた。

(六) 最後に

六月発行小田原史談前号で、東学寺本堂の天井に市内久野の日本画家山崎弘氏の雲龍型の龍の天井絵が奉納され、日光の東照宮の龍の絵に負けない迫力で、寺の名物が一つ増え喜ばしいかぎりの記事が載っていた。

十年程前になるか、上府中老人会の講演で中野敬次郎先生が清涼寺式釈迦像が当地にあることは、この地域が昔からのすばらしい文化の地であった証查であると結ばれた。

我々はこの文化財を大事に保存し、次代の人達にしっかり引継ぐ責任を痛感する。(追記)



釈迦如来立像

東学寺寅薬師は、関東九十一薬師霊場第二十六番札所で、五百有余年地域の方々がこぞってお守りし深く信仰した薬師如来さま、我々

が入宋し台州で九八五年作らせ、翌年持ち帰った三國伝来の瑞像釈迦といわれ、頭部は螺髪でなく大きく巴に巻く巻縄状に彫られ、袈裟は流波状衣紋の通肩法衣

寅薬師如来像は秘仏で、以前は十二年に一回、寅年に御開帳されていたが、現在は四月第二日曜日、寅薬師大祭には毎年御開帳されます。

北條早雲と臨濟禪

なかむらじゅんろう
中村俊郎

臨濟宗は唐末期臨濟義玄によって開かれた。当時、唐は、玄宗の時代で、政治は乱れ下剋上が行われ、農家は生活に窮し、その上安祿山の乱が起り、戦乱の世は八年にわたって続いた。臨濟はこの乱世に対処して厳しい修業の結果、臨濟宗を開き、布教もまた厳しく困難な時代であった。

日本の臨濟宗は鎌倉時代僧栄西により伝えられ北條政子は栄西を開山として、正治二年(一一〇〇)鎌倉に寿福寺を建立し、新しい仏教と大陸の生活文化を取り入れた。また建仁二年(一一二二)栄西は京都東山に建仁寺を開山した。開基は將軍源頼家である。下って室町時代となると臨濟宗は貴族的趣味の生活(東山文化)と結びつき有閑の遊戯となる傾向があった。室町時代とは金閣から銀閣の時代即ち、三代將軍足利義満から八代將軍義政までの時代である。

室町時代前半は義満の全盛の時代で後半義政の前後は衰退の時代となる。

北條早雲(伊勢新九郎盛時)は永享四年(一四三三)備中で生れ康正元年(一四五)同族伊勢駿河守貞道の養子となり長禄元年(一四七〇)所領を一族に分割して上落したという(『甫庵大閤記』)。初めに建仁寺に参禅したといわれているが、その動機や資料は一つもないが寛正五年(一四六四)足利義視の申次人となる前後ではないかと思う。建仁寺は早雲の館から近くにあったかもしれない。將軍源頼家開基のため、上級武士の信仰が厚く一休禪師も若い時作詩を学ぶため修業していた寺である。

大徳寺へ早雲が移った時期も不明であるが、兄弟弟子の東溪宗牧の語録に大徳寺四十年代住持春浦宗熙に師事していたと記されている。宗熙は、寛正三年(一四六二)

大徳寺住持になっている(『日本史総覧』)

応仁元年(一四六五)五月応仁の乱が起り、京都の有名な寺院相国寺、大徳寺など社寺邸宅が多く焼失した。寛正の飢饉に続く戦乱により民衆の生活は不安な状況となり、これを打破しようとして土一揆が頻発した。自然の災害は兵乱によりますます拡大し、洛中餓死と諸国の兵乱は義政の失政によってもたらされたものである。唐末期の様相と同じような状態をていした。この経験、体験は早雲の心に一層臨濟禪に傾斜していったと考えられる。

文明五年(一四五三)細川勝元、山名宗全両軍主將の相ついで死にいかかわらぬ兵乱は止まらなかった。

文明六年(一四五四)一休禪師は大乱で焼けた大徳寺再建のため、勅命を受け四十七代大徳寺の住持となり、堺の豪商尾和四郎左衛門等の寄進を受け着々と楼門堂宇の建立をはじめた。一休禪師は自由奔放に人生を生き衆人と同じように酒を飲み、肉を食い遊女屋へも登楼したが、それでも人々は生ぐさ坊主とは言わず、人

気があり尊敬されたのは衆人の中に溶けこんで生活したためと思う。一たび座禅すれば己に厳しく、法話はわかり易く大寺の住持など足元にも及ばない心を持っていた。一休禪師が大徳寺住持になるまで宗熙から十三年間七人の住持が交代していることは大徳寺の疲弊を表していると思ふ。

文明八年(一四七六)駿河の宗長は今川家を辞し、一休禪師の酬恩庵へ来て弟子となった。なお宗長は京都種玉庵の宗祇の所へ連歌の教授を受けに通っていた。文明十九年(一四八七)早雲は駿河に下り、今川家守護職争いに決着をつけ、今川氏親を駿河守護にした。以後駿河に留まり、氏親の後見人兼一部将となり東奔西走して尽力した。延徳四年四月(一四五五、七月明応と改元)伊豆に打入り、韮山城に居を置き明応四年(一四五五)小田原へ進攻し、箱根湯元に早雲庵を建てた。早雲が小田原へ入る前大森氏時代の寺は小田原隣接地帯を含めて二十九箇寺であったが、後北條時代には五十九箇寺内臨濟宗五箇寺曹洞宗は三十一箇寺も増えた。

永正十六年(一五一九)八月十五日北條早雲は伊豆韮山城で亡くなった。二代氏綱は早雲庵の所へ氏寺早雲寺を建立し、以天宗清を大徳寺から迎え開山とした。

早雲寺殿廿一箇条の家訓の中に「あるがままの心」と言ふ言葉が三回も書かれている。早雲は余程この言葉が好きだったようだ。この意味は正直な嘘をつかないということである。その元は臨濟宗の平常無事ということであると思う。早雲は旧い体制を打破し、臨濟禪で体得した、あるがままの心をもって領国経営をした。そして北條氏は代々それを守ってきた。

参考資料

『芦間乃道』No.21・22・27・28・31・36

『臨濟録』『臨濟・莊子』(岩波文庫)『中国の歴史(中)』(岩波新書)

『室町記』(朝日選書)『南北朝』(朝日文庫)『鎌倉文化』(教育社)

『足柄時代』(講談社)『中世内乱の群像』(河出文庫)

『宗祇と箱根』(新潮社)『一休狂雲集の世界』(人文書院)『一休』(中公文庫)

八十七年ぶりのお礼

露国・日露の役俘虜のこと

前編(五)

隠岐威重

ハルビン、西欧とは別の異風を抱いた、淑女の如き美しさに、大連ではその雄大さに打たれた。この北の住人の骨太の建築感に歎じ入った。

水の都創りに心を満たしたピョートルは、今度は大ロシアの皇帝として西欧、旧修の地オランダ、パリ、ロンドンにも遊んだ。

その旅の中で彼独得の奇行も多かったが大露国皇帝の威力が、西欧諸国の要人、貴族、大衆にも好意の笑いで受け入れられた。露国は欧州の東方の大国として認められていったのだ。

海へ。東方シベリヤの海、世界の海へ。欧州の国ロシア、未開のシベリヤを抱えるロシア。前者は世界を求めて、後者は、その寒冷の地に食を与える道としての海に向かつて走り出した。海に入る前にもう少しシベリヤにとどまる。シベリ

ヤの巨大資本、当時露国一の露米会社に触れよう。

黒貂が一匹幾らするか知らぬ。走る宝石と云われ、当時の露国の台所を支えたのだ。宝石だ。パリ辺りの貴婦人達が馬鹿値で争って求めたと云うが。冬の装飾用の防寒外套、襟を飾る首飾り、使用の道はそんなものだろう。

老人も昭和のはじめ、中国東北の地に就職したが、冬は寒いことはたしかに寒い。が、学生時代の古オーバーで何とかなった。屋外作業の時は会社支給の犬の毛皮を裏付けした外套を着た。重くて毛がチクチクするので直ぐぬいでしまった。どうしても、それが無ければ駄目だった訳ではなかった。大人と称される中年の幹部級になると、皆決まってラッコ皮の防寒帽、また襟に大きなラッコを飾るシューパー(裏にも毛皮を付けた外套)を着用していた。俺も

いつか、余裕の出来る幹部になったら、十年ぐらいはかかるかな、その時あんなシューパーでも作るか。そんな程度の要望だった。貧乏書生の推理で誠にすまぬが、いくらパリの女性が気張ってみても総売上げでは大した額でもあるまいと思っていた。黒貂が、ラッコが一国の経済を支える、と云っても信じられなかった。余程貂の毛皮が高価なのか、露国の当時の経済規模がそんなに小さかったのか、よく分からない。でも、黒貂、ラッコの毛皮が当時の露国を支えていたことは事実だ。

その毛皮、露国一の毛皮会社露米株式会社について。女帝のカテリーナ二世の時、キエフの商人G・シェリコフ、当時、キエフは広域商業の地で、その市の名は商人の代名詞……大阪商人の如く……が野心を抱いて中央シベリヤの中心地イルクーツクに集まって来て毛皮商を開いた。当時イルクーツクには六十余の毛皮商が乱立し、過当な争いをしていた。それを才商シェリコフは一つの露米会社にまとめた。(註・露はシベリヤ、米はアラスカを示す)

獣皮は国の宝、経済の礎その毛皮を扱う会社は国の基幹産業、基幹故に国の保護を求める。魚心には水心、そこに癒着が生まれる。シベリヤ視察に元老院の幹事レザノフが来た。この男は相当な者だ。以後の彼の業績がそれを示す。先ず手始めに、レザノフはシェリコフの娘と結婚する。その結婚は商人シェリコフの甘言明だが、レザノフは露米会社の重役に、シェリコフの会社は宮廷の重臣を重役とし得たのだ。両方共の利益の合点か。レザノフはモスクワに帰り宮廷の重臣と、この国第一の資本の代弁者を勤め、猛威を奮った。女帝も貴族達も露米会社の株主に仕立てられ、後には会社の本部を首都に移しその代表になった。その後のレザノフは海に、日本国に繋がりを生ずるがそれは後に語ろう。

一方シベリヤはシェリコフの死後、毛皮業界もまた混戦になった。北太平洋の海獣を独占するアメリカ会社をムイリニコフが興し一時盛んになったが、資金が続かずシェリコフの娘と合

し、露米社を牛耳ろうとしたが果たせなかった。会社の実権は首都のレザノフが握っていた故に。

それより、会社を根底から揺るがせたのは森の宝石黒貂が減った事だ。生前シェリコフもそれを知り眼を海洋に向け海獣を求めていた。アメリカ会社のムイリニコフも海獣に目を向けていたのも同根である。アメリカ大陸とシベリヤの境をなす海峡を発見したデンマーク人ベリリングがオホーツク港より東方の海を探検したのが一七二八年だ。

カムチャッカが黒貂の巢だと云う噂からその半島を求めたコザックの隊がいた。一六九五年の夏の終わり、北極圏アナドウィルの城塞をその指令で五十人の長のコザック、コズイリヨフスキーがカムチャッカに向かった。彼の隊は五十人のコザックと約同数のトナカイをぎよすユカギール人(古代シベリヤ人の一派)だった。カムチャッカには原住民カムチャダール族がいた。原住民達は石を投げてコザックに立ち向かったが、大砲四門を備える露軍には勝つ術もない。瞬く間に巨大な

半島は制圧されてしまった。その後原住民の反乱が起きたが再び制せられた。占領、再制圧は短い間で、一六九五年に始まり一七〇一年には終わっていた。総面積三十五万平方キロ、日本の本州の一五倍の地を六年の年月と僅か五十人のコザック、砲四門が制したことになる。

だが、半島には黒貂が少なかった。原住民カムチャダルは海に食糧を求め、森に入るのを好まなかった。黒貂を獲る術を知らなかったのだ。コザック(露米会社)は毛皮税として原住民から毛皮を取り立てていて直接には狩猟をしない。思惑が外れた。だが、カムチャツカ半島の先には数珠のように連なった島々が南西に延びて大洋を遮っていた。千島列島だ。その先の大きな島が北海道だ。その島々には海獣が溢れていた。コザック(露米会社)は思わぬ拾い物をした。ラッコ、アザラシ等々を。だが、その海獣は浜辺に居り人が近づけば海に逃げる。森の中に畏れを置いて拾うように黒貂を獲るのは違ふ。海獣を獲るには銃器が必要になる。原住民にはそれが無い。毛

皮税を強いられる原住民はそれを嫌い島伝いに南に逃れる。陸のコザックも海は苦手だ。千島発見後数十年の間は、半島から三つ目の島にまで足跡を印しただけだった。だが海辺には宝物が遊んでいる。イルクーツクにいるシェリコフはあぶれ者を集め鉄砲隊を作り千島に送った。その捕獲隊は千島の中央より北海道に近いウルップ島まで来て猟をした。ウルップの隣はエトロフだ、松前藩の択捉には番所があり、ニシン、鮭を獲っていた。国と国の勢力が小島一つ離れて対峙していたことになる。日本の北辺の海は騒がしくなってきた。

だが、露国側にも弱点があった。宝の山に入り獣を掴みどり出来たが、食糧がなかった。冬は氷雪が覆い、夏には濃いガスが太陽を遮る。食を生む青草が茂らない。捕獲隊員は飢え、血を壊していった。このことは、半島・島々だけでない。全シベリヤに云えることだ。森に走る寶石がいようが、それを獲る人々の食こそ先ず先決だ。近代になり地下に如何に宝の山が横たわっていること

がわかって、それを掘り出す人々に食を与えることが出来ないと言ふ最大の欠点を、この北辺の地は担っているのだ。いまも全く変わっていないことは銘記すべきことだ。

……この辺で一息入れて、眼を再び西方に転じてみよう……。

十五世紀は西欧の大航海時代の幕開けだ。ポルトガル・スペインの冒険的航海を経てゲルマン系のオランダ・イギリス・スエーデンの科学的な航海・海洋貿易の時代に入り、その国々は充実していった。

その頃やっと北の巨人は目を覚まし、海に向かって走りだした。その第一走者がピョートルだ。ポルトガルの航海王子エンチが航海の学校を開いてから二百八十年程後に彼は走り出したのだ。

ロシアのシベリヤ東進も終わり、その地の維持には欧露からシベリヤ東端までの航海が切実に必要になってきた。

その実質の第一走者がクルーゼンシュテルンだ。彼の名の字面からドイツ風の香りがあふ。生地はバルト海

に面したエストニアだがながくロシアに住み付きドイツ語を使う家庭にいた。新教から改宗してロシア人になった(正教を信ずる者正統のロシア人と見做された)。

一七八五年にクロンシュタット軍港にある海軍兵学校に入り、在学中トルコ及びスエーデンとの戦いにも参加した。後に英国留学の機会を掴み、英国海軍で学び、英海軍将校としてフランスとの戦いにも征き、又英艦で世界周航もして英国に多くの友を得ていった。

彼は紳士だ。過去の己れの戦勲も語らず宮廷の政争の外にいた。ただ、海に向う航海の基礎を築き、海軍兵学校を育てその校長に、後には海軍大将の位に昇ったがやはり政治の外にいる姿勢は崩さなかった。彼の著書、航海業績は海外の方が高名であった。

ピョートルの航海始めから百六十年を経て一八〇三年、ロシアは初の国家事業として世界周航に乗り出した。帆船の時代、世界周航はロシアにとって誇るべきものだ。国の民度、統治力、科学力、がある水準に達したことを示すことだ。その誇るべき位置、航海の指揮をクルーゼンシュタインがとり、彼の名がその航海誌の上に誌された。この第一の周航の直ぐ後、踵を接するようゴローニン、リコルト両少佐の第二回目の周航、更に五十年後プチャーチンの周航と続く。そして、これは第四回目と呼ぶべきか否かは別として日露の役の際、バルチック艦隊を率いるロジェストヴンスキーの航海がある。

十九世紀の三度の世界周航が何れも日本を目指していた。それはシベリアの食料補給と交易によってその資を得ようとしたことで目的は少しも変わらなかった。第四回目は前三回の如き「シベリアのくびき」から脱しようとして来たのだ。日本は国の全力を挙げて戦った。日露戦争である。

ロシアの原型理論、南下理論の具現化だった。再度かかる事のなからん事を祈る。

三月十日

東京大空襲を顧みて(五)

松本巽

敵来襲の激化
弾が底をつく

B29は、昭和十九年(一九四〇)十一月二十四日の、東京初空襲後、昼間編隊を組んで九千メートルないし一万メートルの上空から東京各地の爆撃を続け、その回数が増え重なるにつれて、次第に弾丸が間に合わなくなってきた。

私たち独立高射砲第一大隊第四中隊が布陣する東京湾十号埋立地(十号陣地と呼んだ)より西南の川崎市の軍需工業地帯に至る迄の間は、東部軍高射砲部隊が展開していなかったためである。B29の侵入路となっていた。

駿河湾から侵入しても、必ず十号陣地南方を脱出する。

と多くなったのではないかと思います。

それに、第四中隊に配属された九九式八センチ高射砲は、開発が野戦高射砲より遅かったため、弾丸の備蓄量が少なかったためである。

一回の空襲で陣地内の弾薬庫は空となってしまい、よその高射砲隊に連絡して残っている弾丸を借りに行くこともあった。

しかし、ガソリンがないため、車輛は動かせず、馬車を取りに行く始末であった。

また、薬莖に使用する真鍮の原材料も底をついていたので、使用済みのから薬莖は、すぐさま火薬工場に送り返さなければならなかった。

そのため、中隊では兵隊が、敵機が退去空襲が終わると休む暇なく、中が真っ黒となった薬莖を、荒縄を巻

き付けた棒で夢中になって磨いた。

そうしなければ、次の空襲に備えることが出来なかったのである。

発射中止命令
B29を見逃す口惜しさ

昭和二十年一月頃には、弾丸の製造が材料不足と共に火薬製造工場が爆撃された関係で間に合わず、師団司令部命令で、一回の空襲に際し発射する個数を、一箇分隊五発迄と制限されたこともあった。

前に記したように、敵B29は、高射砲陣地上空にさしかかると、高度を一〇〇メートル前後変化させ、それに蛇行飛来し、高射砲の照準を狂わせるので、照準を定めることが難しい。そのためB29の進路には数多くの弾丸を発射して弾幕を張るようになり、撃墜することが困難であった。

しかし、我々は一発一発を有効に発射しなければならなかった。

また、あるとき空襲を受けているのに、「この敵機に対し実弾を発射するな。この敵機を目標に演習せよ」との師団命令が発せられた

ことが度々あった。

我われは、涙をのんで演習しつつ、敵機を見逃すのみであった。

弾薬庫に弾丸があるのに、上官に聞いたところ、師団司令部には、もっと大規模な空襲に備えて、弾丸を蓄えて置く意図がある、という答であった。

敵機に対する発射中止命令は、当時、国民が知ればびっくりする内容である。公用で外出したある兵隊が市民から次のように聞かれたことがあった。

「B29の空襲があったのに、高射砲隊は何故発射しないのか?」

疑問とも非難ともつかぬ声を聞いても、黙っているより他はなかったのである。こういう弾丸の制限は昭和二十年三月十日の大空襲後の小規模の空襲にも続いた。

夜間低空東京空襲の情報

昭和二十年一月頃、中隊全員に、身振りするような敵しい情報が伝えられた。

それは、ビルマ(現ミャンマー)方面に於て、B29による夜間の低空空襲により戦果を挙げた、優秀なる

米空軍司令官が、マリアナ諸島のB29基地に赴任したので、近いうち、東京も低空による夜間爆撃を受けるであろう、という内容である。

おそらく東部軍高射砲各部隊をはじめその他の防空部隊全員に伝達されたであろう。

この情報が伝えられて以来私たち高射砲隊は、照射隊と共同による夜間演習を行い、夜間空襲に備えた。

今までは、夜間低空での大空襲はなく、昼間高度九千メートルか一万メートルでの爆弾投下であった。

昼間は時々の空襲で戦闘し、夜間は演習と毎日忙しい日を送ることになった。

優秀な米空軍司令官とは誰であったか――。

前回引用したが、米空軍元帥カーチス・E・ルメイの回想を航空史家ビル・イエーンがまとめた『超・空の要塞B29』(渡辺洋二訳・朝日ソノラマ文庫)を読むと、ルメイがそれに該当するようだ。

彼は一九四四年(昭和十九年)八月、第二十爆撃兵団司令としてインドに着任。

翌年一月、マリアナの第二十一爆撃兵団司令官として転出する迄の間B29の前進基地中国・成都とインド・カルカタから、長崎県大村や台湾・高尾の海軍航空廠、満州・鞍山・昭和製鋼所、満州飛行機奉天工場、ビルマ・ラングーン、シンガポール、タイ・バンコク、中国・漢口など、日本の本土や支配地の軍需工場や軍事的要衝地点爆撃に指揮をとっている。

アメリカ軍は、航空群司令が機上で直接指揮をとるのを禁じていた。

だが、ルメイは、ヨーロッパ戦線から、第二十爆撃兵団に着任してから、日本軍戦闘機部隊の力量を知るために、一九四四年九月八日、満州・鞍山の昭和製鋼所の空襲に直接空中指揮をとる張り切りぶりであった。

ところで、これら一連の空襲で教訓が得られたのは、一九四四年十二月十八日の漢口空襲に於て初めて採った、大規模な焼夷弾攻撃であった、と次のように記す。

極東の家屋の主要建材である木と紙が焼夷弾の炎でたちまち燃えて

大火災を生み、非常な爆撃効果をもたらすことがわかったのは、大きな収穫だった。ヨーロッパの石とレンガの目標に比べ、この種の建材には焼夷弾が有効と気づいたのだ。

焼夷弾攻撃については、米陸軍航空軍は、既に一九四三年(昭和十八年)三月、ユタ州ダクウェイ実験場で一連の秘密テストを行っていた。

まず、典型的な日本の町を細部まで正確に再現するため、在日十八年のニューヨークの建築家を雇い設計を担当させている。

ついで建築材料は、はるかハワイから運ばれた。あるいは日系の建物を利用したのだろうか？

実物大の日本の市街の建設は陸軍航空軍が担当。本棚の本から床の敷物(畳のことか?)に至るまで本物が使用された。また、日本と同じ装備の消防団が組織された。

この模造市街を攻撃した結果を、デュボン、スタンダード石油、国立防衛研究所がその研究、成果を持ち

より、一九四四年(昭和十九年)末に、ガソリンをゼリー化剤としたナパームをベースにした新型のM69焼夷弾が実用化された。

そして、漢口攻撃の実戦例から、焼夷弾を集中投下して大規模火災を起こすためには、約四百機のB29が必要と推算された、という。

昭和二十年三月十日

予想した時がやって来た。昭和二十年三月九日の夜である(陸軍記念日の前夜である)。

よく晴れた夜であった。

北風は強かった。

夜の十時三十分頃である。

突如、中隊の兵舎のベルが鳴り響いた。

即刻、「戦闘体制二入レ」の命令だ。

中隊全員は、直ちに陣地につき、射撃体制に入った。

東京防空隊に対する司令の一切は、司令部から発せられる。

続いて、

房総半島沖百キロ、高度一万メートル、B29約四百機本土接近中、

司令部の情報は、中隊長

よりマイクを通じて流された。

東京防空隊司令部は、上野の地下にあると聞いていたが、確証はなかった。

各所に防空監視所はあったが、房総半島では千葉東金監視所が我われ高射砲隊の最前線で、目の役割を果たすものであった。

この監視所から東京防空隊司令部に報告される内容に基づいて、高射砲隊へ命令が出される訳だ。

私は、照準台に座り、砲に装着された照準眼鏡、電気装置、計器を点検し、B29の飛来今や遅しと待ち受けていた。

しかし、B29は現われな

い。

上空には、わが軍の戦闘機が、二、三機飛んでいるだけだった。

空襲を受けた始めの頃は、日本の戦闘機がB29に群がり機銃掃射を加え、また、体当たりもした。

しかし、三月に入ると、日本の戦闘機隊は、特攻隊として転用されていた。

敵機来襲に際し、東京防空隊全機出動と報じられる

が、上空を飛んでいるのは、二、三機である。

しかも、古い型の航空機で、航続力が無い。いつも空襲と同時に飛び立つが、B29が東京上空に来襲するときは、燃料補給のため降下してしまふのが常だった。

しばらくたってもB29の金属音は聞こえて来ない。射撃準備体制に入って約三十分位たったろうか、戦闘体制が解除された。

民間の警戒警報も解除された。

司令部より情報が伝えられた。

敵機は、日本の対空砲火を恐れ、房総半島五十キロ地点より撤退したとの事である。

私たちは、陣地を離れ、軍装のまま兵舎で仮眠をした。疲れているので、ぐっすり眠った。

それから一時間ぐらい眠ったか、けたたましいベルの音で飛び起きた。「戦闘体制二入レ」の合図だ。三月十日の何時頃か分からなかった。

続けざまに「射撃準備」と、マイクを通じて中隊長の命令が発せられた。(続)

根府川ビーチ

磯干狩の思い出と

“なみのこ村”

星野幸一

一、磯干狩の思い出

私は小学生の頃、毎年五月になると隣村の上多古に住んでいた叔父(故人)が磯干狩に連れて行ってくれた。昭和初期のことで場所は根府川あたりの磯であった。

昭和三年は小田原―湯河原間が複線化並びに電化された年であり列車のダイヤも一時間に一本位の割であったろうか生活のテンポも万事のんびりとした時代であった。

一行は五、六人のグループとなり弁当は芯に梅干の入った握り飯と沢庵、アルミニウムの水筒にお茶を入れて携行したのである。

道具立ては箱メガネにさぐえを挟む長さ一、五米位の竹竿、何れも手造りで箱メガネは有り合わせの板を縦横十五糎位の箱型に組みガラスは海水が入らないよう

にパテで抑えた。竹竿の先端に八番線の針金を長さ十糎位に四本切り三日月型に曲げたものを等間隔に固定して海底のさぐえを挟む仕組み、鮑を岩から剥がす金篋や小さな熊手等が携帯装備のすべてであった。

一行は根府川駅で下車、坂道を下り磯へ向かう。出合った村人たちとは言葉を交わし沿道の風景や人情に魅せられ根府川村は静かでのんびりとした漁村であった。

漁はさぐえ、鮑、常節、しつたか等を狙い小さな貝や磯巾着等は見逃し鱧や海鼠、蛇鰻等は避けたのである。小蛸を捕まえたこともあったが軟体の八本足は余り気持の良いものではなかった。

午前中の漁が終わると楽しい晝食である。薪を集めて採れたてのさぐえを壺焼きにする。潮騒に耳を傾け磯

浜での食事は野趣に富み舌鼓を打ちながら獲物談義に花が咲いたのである。午後の漁を終えて四時頃には帰路についたが獲物を手坂路を登るとき得も言われぬ満足感を味わったものである。当時の磯は乱獲時代以前であったから結構貝を採ることが出来た。

私はこの磯で潮の干満による汀線の移動も体得した。引き潮では沖の方へ五十米位潮が引いたので遠浅で貝が採れ満ち潮のときはあれれ……と言っている間に潮がさしてきて波が立ち驚いて慌てたものである。帰毛後、夕餉の食卓を飾る貝料理も楽しみであった。

磯干狩が今も尚、思いでとして脳裡に蘇るのは朝に夕に箱根連山を眺め育ってきた少年の心に海に対する憧憬が潜んでいたのではなからうか。

私は昨年の秋、庭木の剪定中梯子が摩れ二米位の高さから転落、右踵を骨折して市内のM病院で二ヶ月の入院生活を送った。たまたま私の隣のベットに根府川のS氏が農作業中滑って

段畑から転落、大腿骨を折って入院されていた。骨折も日柄で快方に向い毎日いろいろな会話を交わす間柄になった。

その折「なみのこ村」の話聞いたのである。場所は真鶴有料道路に隣接する根府川漁協所有の六〇〇〇坪の松林(樹齢六〇―八〇年)の中である。松林は魚付林と云い名前の示すように郷士の先人たちが山の幸、海の幸の中から経済の安定と生活の向上を目指し自生と植え付けによって育ててきた。

村の命名はこの磯に「なみのこ」という小さな貝が生息して居り太古の昔からコロニー(生息地)であったこのビーチのシンボルとなったのである。魅力を感じない小さな貝だが小田原海岸や湯河原海岸(吉浜)の砂浜では見られない。

松林の中には九十六名の仲間たちによってカフェテリア、魚魚橋がたてられた。LOG(丸太)ハウス内は木の香りが漂いテーブルや椅子等もむきだし丸太でありすべて組合員全員の手造りという。そして海中に潜水水中散歩を楽しむ

ダイビングや浅瀬でのシュノーケリング、ミニアスレチックのある子供広場、煙りが気にならないパーベキューガーデン、キャンプエリア、木陰の駐車場等組合員は交代で常駐、海岸の美化、施設の管理、安全な運営に当りビーチを訪れる人たちに



根府川ビーチ

ダイビングや浅瀬でのシュノーケリング、ミニアスレチックのある子供広場、煙りが気にならないパーベキューガーデン、キャンプエリア、木陰の駐車場等組合員は交代で常駐、海岸の美化、施設の管理、安全な運営に当りビーチを訪れる人たちに

マリソレジャーを楽しんで貰えるよう、時にはアドバイスもしてサーブに努めている。

潮風に戯れるギャル、カラフルで大胆な水着、伸びやかな肢体と嬌声、勤めとは云え終日浜辺の美女たちを眺めるのも満更ではないと初老のS氏が云ったが余暇時代の到来を迎え健康と美が一致した新しい海辺のライフスタイルではなからうか。

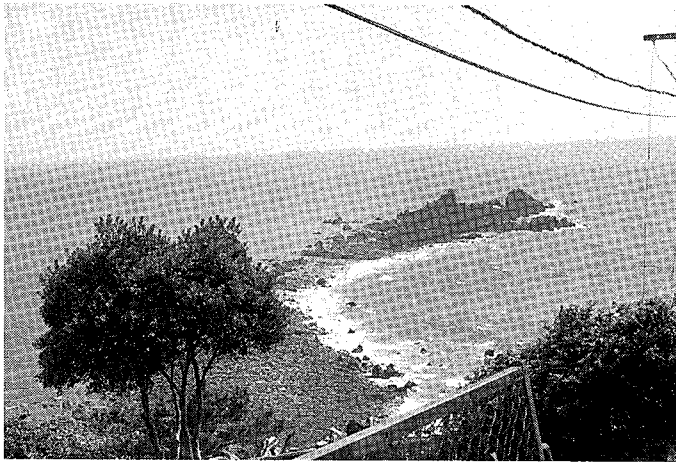
仕事のストレスを「思風」に散らし、潮風が吹き抜けるテラスへ出て青い海相模湾を一望、デッキチェアに横たわり美味しいコーヒードキながら心の安らぎを求めるといふ思考である。

三、根府川村の沿革

私は片浦海岸に点在する山間の集落(石橋村、米神

村、根府川村、江之浦村)を遠望するとき何時も城左門氏の詩「思風」が脳裡に浮かぶのである。

冬近き海沿い小村
一筋の埃の往還に
人気なく家居のさまは
静もりて障子の白く
山茶花の葩のみ赤し
裏山の紅葉黄檗の葉
紅に白昼を夢み
波の音峰のあらしに
日を一日睡むりてあら



真鶴ケープパレスから三石を望む

平成一・九・二八

ん
あゝ思いなく言あげも
せず
海沿いのこゝな小村に
妻と二人老いて行かば
や
美しき民とならばや

この詩は磯千狩以外に訪れることもなかった根府川村に対する私のイメージであった。

ところで山間を流れる白糸川は村人の暮しや郷土の歴史をどのように染み込ませて流れてきたのだろうか。

『新編相模国風土記稿』によれば平安時代中期(十一世紀)上総から広井一族の末裔が始めてこの地に移り住み根府川太郎と称した。石橋山の合戦では頼朝の先導を務め、爾来世々広井を以て氏とした。北條早雲、氏綱の二代に仕え河越合戦では討死、下総国府台合戦で軍功を立て大閩小田原攻めでは北條美濃守氏規に仕え豆州韭山城に籠り傷を蒙る等、系譜に見る一族は戦乱の世を武士として貢献した。小田原落城後は民間に下り採石の御用を勤めてきた。

江戸城普請の時には切り

出した石を解で沖の大船に積んで下し浦賀まで二十六里、それから江戸まで十里、計三十六里の海路を遙々直送したのである。

石は根府川石として世に知られ緻密で堅牢、年を経ても剥落せず石垣或いはそのまま石碑や墓石、庭の飛び石等に用い海岸の磯朴石は假山(つきやま)の庭石として觀賞された。採石は徳川幕府創設当時(一六〇四年)に始まり天保年間(一八四〇年代)には採石場が十六ヶ所あり江戸時代は江戸か小田原を相手の石材産業と舟運で栄えたものではなからうか。

曾て石工たちが鑿を打ち込んだ石山や白糸川沿いの道を石材搬送する村人たちの姿が彷彿とするのである。徳川幕府二代家忠以降、熱海街道に根府川関所を設け西方は山に抛り東方は海辺に至るまで柵や麓砦をめぐらし番所を置いて警備を固めたという。世々小田原領主の預るところであった。

漁業は漁船二艘、藻取船四艘と記されているが採貝、採藻が主で漁業依存度はきわめて小さく海草は若布、荒布、搦布、鹿尾菜、天草

等を採用した。
なお、農業は山間のため収量はすべて平地の半分であり農作業の合間に石丁場の仕事や海業に生活の糧を求めてきた。

この山間の地は明治以来先覚者たちの汗によってミカン栽培が定着したが昭和三十九年の新幹線開通直後はミカン農家が最も活気に満ちた時期であった。巷間「ミカン成金」という言葉を耳にした程である。

ミカン畑は農道を舗装、スプリングラーの設置等経営の近代化を進めてきたが輸入オレンドの増大や果樹作の多様化によりミカンは低迷期を迎え片浦地区は一時三百ほどの農家があったが二十年程前から価格低落などの影響を受け栽培農家は四分の一程度に減少したという。地域の活性化をはかるため六年前から地元農家で協議会を発足。協議を重ねた結果この地区は東京横浜に近くて手つかずの自然がたっぷりというポテンシャル(潜在的力)に満ちている。そこで県や市の助成を受け訪れる人たちに自然との共棲感を味わってもらい地元漁業と生活の接点



材木屋綺談 その二

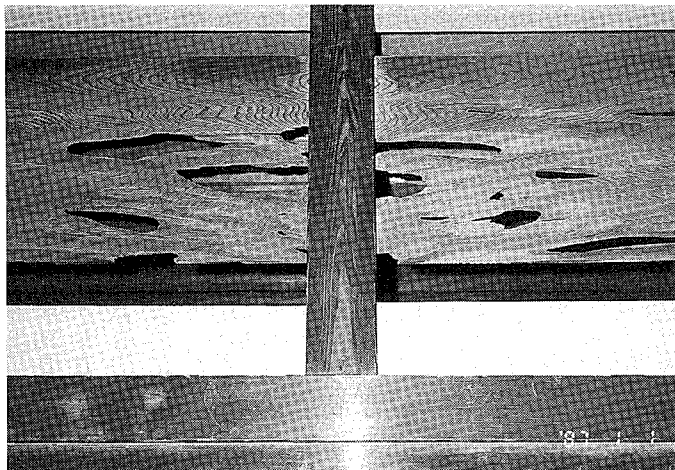
たかた・きくせん

も神代杉は数十万年も昔に、巨大な地変によって土中に埋まった杉の大樹が、永い年月の間に次第に炭化の途をたどる第一歩の姿である

銘木として珍重されるのである。
小田原近辺では箱根、伊豆天城の火山地帯から多く掘り出される。しかしもともと大木がそのまま埋没しているの、これを掘り出すのは容易ではない。しかも用材として掘り出すには疵をつけないようにしなければならぬ。まるで古墳

しかし今はもうほとんど生産されないの、ホンモノの神代杉を写真に撮り、その原板を化学処理した新建材しか見ることが出来ない。家具店で見かける青色の杉の大きなテーブルがそれである。
地中から掘り出す神代杉に「れんこん」と呼ぶものがある。同じ杉材だが地変

珍重するのである。欄間以外にも廊下天井などに使って面白い効果を出している旅館を見たこともある。大自然が造り出す造形の面白



神代杉と言っても知らない人が多い。小田原城天守閣に上るとき、入口正面に板壁となつて観光客の目を惹くのがその神代杉である。幅一メートル五〇もあろうかと思われる茶色の大きな板で、傍らにその説明も掲げられている。

と言われる。炭化が進めば仙台特産の「埋れ木細工」のようになり、さらに年数を加えれば泥炭のようになるのかも知れない。

の発掘のようになりから少しづつ、掘り出さねばならないから大へん手間がかかり高価なものとなる。私もこの神代杉を扱ったことがあるが箱根産のものは色が茶色も薄く良質ではない。天城産の方が青色が濃く奇麗である。天井板などに使用すると、少し暗い

の際の作用か、樹自身の材質のゆえか分からぬが、縦に一面に気孔が生じ、まるで食用の蓮根のようになっている。これを板に製材すると複雑な形をした穴が面白い模様をつくる。穴を透かして先を通すので、これを欄間板に使用すると座敷も明るく孔の模様が美しい。木材業者はこれを「れんこん」と称して

たのである。昔ながらの村の暮しが変わるのである。最近相模湾では沿岸域の開発が進み海岸の浸食や土砂の採取河川の流入汚染、赤潮の発生等東京湾の余波を受けて環境システムの変化が僅かずつではあるが現われ始めたという。

を探りながら新しい海業、なみのこ村を開村したのである。

松籟と潮騒、磯浜に囲まれたロケーション、新しい海岸のライフスタイルを創出して根府川ビーチのイメージを盛りあげてゆくことだ

ろう。
なお、根府川村で忘れることの出来ないのは大正十二年の関東大震災である。たまたま乗客四百名を乗せた熱海線下り列車が根府川駅に停車中、山津波に襲われ海中に落ち押し寄せた大

津波によって乗客ほとんどが死亡する大惨事となったのである。
四、結び
根府川村は広井一族をパイオニアとして約八百年固

だが時流れて町は今ミカン産業が低迷期に入りターニングポイント(転換期)を迎えたのである。磯千狩の思い出に描かれたキャンパスは半世紀余を過ぎて身近なレジャーを楽しむリゾート、なみのこ村に変貌し

さる。同じ杉材だが地変

明治の風流人

横山清男の旅日記

『熱海の藻屑』(三)

佐久間 俊治

やどりにかえりて寿衛子ともども
東京、横浜へ送る文かき歌読みなど
するうち、片岡恆次郎訪い来てむか
しがたりしてかえれば、いつものこ
とおえて湯あみして、また内藤
(姪補衛子方)へふゆもの送りて後衾
(寝床)に入りぬ。

同(四月)二十一日

きのう前野塚子(寿衛子の伯母で高
知市に住んでいた)より文おこたる
(送って来た)。そが中に「ここからは
高知での塚子達の話」帯屋町(高知市
にあり)那須完一(の庭のさくらを見
んと、松村信喜と三人り市街を行く
うち、いつしか連れをはぐれて一人
那須の家にいそぎ行きて見れば、ま
だあるじもかえらざれば待ちわびて
(まちくたびれて)庭をながめる折し
も、さと吹く風に散りしく花はさな
がらふりくる雪かとおやまたれたり。
さればあるじがもうけおきし(用
意しておいた)料紙(用紙)、硯とり
て、

我のみはおそきあるじを待つか
おにおもいみだれて散る桜かな

ほどなく二人は入り来りて、はや
歌よみしかといひもあえず(いうや
いなや)筆をとりてあるじ完一の読
める歌、

おもいきやかりのやどりにおも
うとち(花を)愛する仲間の
かかるなぐさ(慰みか)のまど
い(集まり)ありとは

また信喜も池の鯉を見て、

さむからぬ花のふぶきに我のみ
か池のひごいもうかれいでけむ

また酒肴をすぐにもてこんといひ
つるもおそければとて、信喜また読
める歌、

契りてもおくれがちなる世の中
にあわただしくも散る桜かな

かくするおり、さきに契りし鈴木
正幹来りて紙をとり鼻おしのごえる
を見て塚子、

おもいきや花に歌よむ紙ならで

正幹とりあえず

散る花をおしむあまりにかみか
けて(神に祈って、紙で)まつ我
はなをふきとどめたり

と。

この歌の言葉を、しなとの神(風
の神)もめでぬらん(ほめたのである
う)、いつしか風もたえて花のちり
やみぬれば、完一、

やや(呼びかけ、おいおい)花
なれ(おまえ)もうれしとのこ
るらんまれにとびこし君を待ち
いて

塚子もまた

吹くかぜも君がなさけに心して
はなにまどいのきようぞうれし
き

信喜もまた、

この宿の深きなさけに桜花
うき世の風やしらで(知らずに)
咲くらん

正幹も、

おもうちまれのまどい(花を愛す

我春風の花(鼻みず)をふくと
は
る仲間のたまの集りに咲く花も
心ありてや散り残るらむ

塚子また、よし野山の一目千本を
おもいて

心ある花とし見ればひと木さえ
千もとにまさるこちこそすれ

などくさぐさとどりどりめでたき言
の葉の花咲き匂うらし。「ここまでが
塚子の手紙」

たち(彼等)の意か)のうたげや
いかにたのしかりしなるらんと、は
るかにおもいやられたり。さてこの
かたがたの歌の返しにはあらねど、
うき橋やまたのつれづれのおりから、
さらでだに(そうでなくとも)忘れも
やらぬふる里(高知)のことどもな
にくれとおもいおこされて、いつも
のこしつけ歌をかつき出しぬ。

うたげせし言葉の花にふるさと
ののどけき春も匂いぬるかな

寿衛子は若きにもにげなく(ふさ
わしくなく)こし折れにて

ふる里ののどけき春もおもわれ
て言葉の花のかぐわしきかな

きょうは以努(子)(横山清男氏の
妻)の文の返し(手紙の返事)したた
めてありしうち湯のたぎる音聞えけ
れば、かの吸入器の筒をたずさえて

かしこ(あそこ)に行き、湯氣をすうてかえり、また歌よみものかきなどして夜に入れば、片岡恆次郎は群馬縣の人をともない来りて、予の蝦蟇画をこうまにえがきてやりぬ。恆次郎は明日東京へかえるとていまをつけて別る。さてこの恆次郎という人は、自由党の中にも世に知られたる衆議院代議士片岡健吉(別註8)の二男也。この日十九日、二十日の新聞つく。

同二十二日 空晴れ、宵(昨夜)の雨雲かわきければ、湯あみしてまた湯氣をすうてかえり、ひるげととのえ、寿衛子をつれてそこはかとなぐ、そぞろあるきしつ、逸山がけ「逸」は「はい」の意味)の連桜今を盛りなるを見て、



横山清男氏はどんな蝦蟇を画いたであろうか
小学館の図鑑を見て 佐久間俊治

その名さえあたみのはやき湯山にもおかれて咲ける花はありけり
また鶯の声を聞きて寿衛子の読める歌

なれ(お前)もまた春の別れをおしむらんうちはえて(ながながと) 鳴く鶯の声

小高き岡に古刹(古い寺)あり、温泉寺(熱海市上宿町)という。境内に藤原卿の古跡をしるしたる石碑あり。また一段下の方に松の大樹あり。廻り一丈(約三メートル)余、高さ十丈余、これなん藤原卿手植の松といへり。そもこの卿の法号(法名)をたまわりしことなど世に伝記多くして人の知る所なれば拙き筆には略しぬ。さりとて歌は腰折れながらうなり出でけり。

しら雲に梢をかくす老松は
鷹ノ巣山もしのぼるるかな
註 鷹ノ巣山 高知県葉山町。
高さ九二七メートル。高知市から約三〇キロ西方にある。

同二十三日
起き出でてものかきつつ午後二時ころにいたりてつよくもあらずよわ

くもあらぬ、ながながしき地震ふる(があつた)につけても、おもいおこせば去りし年、楠衛子がここ(熱海)にありし時つよきない(地震)ふりしことありて常にめずらしからぬと聞きつれば、噴火の力なるらんとなまもの(中途半ばな)学びの心もておもうもいとおそろしく

いずる湯のたぎる(わき上る)ひびきもあるものを
またない(地震)ふりておどろかしぬる

楠衛子が小金井の桜を見て読みしとておこせたる歌十一首

小金井に桜がりせん年月のおもいもきょうはひらけぬるかな(年来の希望も今日こそかなえられる)

玉川のながれを中にこがねいの花はきよくも咲きにけるかな
よそい(装い)せんかがみと見しや玉川の水にうつりし花のおもかけ

花のみかわれもみがかん玉川の清き流れに心うつして
賤が家(みすばらしい家)のひくきのきばにやすらえば香のみぞ高き木のめでんがく

(注) 山椒の芽をすりませた味噌を豆腐に塗って火にあぶったもの。満開の花を豆腐に見立てたのか)
また小金井橋の上にて

見わたせば右も左も川ぎしは花よりほかの色なかりけり
竹むらにうつりし老の鶯も声わかがえる花の頃かな

また見しらぬ老女のねもころなる(こまやかで親切であるの)を

うちとけてかたらうほど(その間)は幾とせをむつびし(仲よくした)友にかわらざらめや(と違いはないのではないだろうか)
かえらんとすれば名残りのおしまれてしばしたたむ花の下かげ

あやにくに(意地わるく)あだな(いたざらな)あらしの吹きくればなばちり行く花のしら雪

行きかい(行ったり来たり)の道のかたえの山吹の花はさかりに人めをぞひく
とある。かえしに

春の日をやましき道にふみかえて(心安らかでないので場所をかえて)あたみに散るはこがねいの花

名残りだに(散り残った花だけでも)行きて見ましや(見たいものだ) 読人の花にちらせし(歌よむ人が花をいろいろ歌によんだ) かがねいのごと

こがねいの花はちるとも、桜木は葉ばかりながら見るもめでたし

玉川の水くきの誌きとめし 言葉の花を見るもたのしき

また去りし日の墨田川の桜がりは楠衛子とともにせざる(一緒に行かなかったの)をおもいて

墨田きしによせんかたきを玉川にうちかえし(かけこぼした)たるなみのおとづれ

同二十四日

宵より雨ふる。湯あみの人々、つれづれのおまりにや手風琴(アコーディオン)をかんでまた笛ふきならし、三つの絃(三味線)をひきてうたいのしるあれば、いと大声にもよむ人ありてとりどりかしましく(いろいろとにぎやかで)

ふりかねし(動くことができない)

ための)すさび(なぐさみ)なるらん春雨と(ともにまどもる) (窓からもれる)いと竹(三味線)の声

予らとじこめて(とじこもって)きこの歌の返しを楠衛子に送らんとしたため、また岡本竹溪、森田喜久子、前野埴子に、いにし(去りし)日の墨田の水くき(ことを書いた手紙)を送らばやと寿衛子と共に夜の更けるもしらで(しらないで)かきおえぬ。

同二十五日

雨なおやまず。きょうもまたとじこめて折り折り窓の戸明けて空をながめやりぬ。この窓のかなたの常磐木(とこむぎ)のひま(間)にしろじろ咲ける花あり。桜にしてはあまり白きにすぎるとおもおうべ(もっとも)、なしの花なりけり。

おくれ咲く桜と見しは常磐木にまじりてしろき山なしの花

内藤清(姪楠衛子の夫)、春樹子(長女)、稜威磨等より、文(手紙)、新聞来る。前野埴子へ文の返し送る。歌の返しは、この道の記(この紀行文)を送ればとめおきぬ。

また竹根材龍の□をほる。きょうは正午の頃より空はれみはれずみ(はれたりされなかったり)道かわかざれば、なお宿にあり。

同二十六日

雨晴れて長閑なり。蝦蟇(がま)の画を描きて後、午後二時頃、寿衛子ともどもそぞろ歩きせんとて磯辺に出でて南へ行く道すがらよめる歌

春の日のそぞろ歩きのものどけさは磯辺にも見る浪の花かな

寿衛子もまた

くれて行く春の磯辺にきて見れば岩うつ浪も花と散りけり

磯山にまぐさ(くさ)刈るおのこに魚見(註・熱海港南端に、錦ヶ浦、魚見崎、烏帽子、兜岩などがある)の道をとえば、かまにてさしておしえけるをおもいて

まぐさかる賤(しず)のおのこに道とえばまがりて行けとかまさしてけり(まがって行きなさいとまがった)かまで方向を示した)

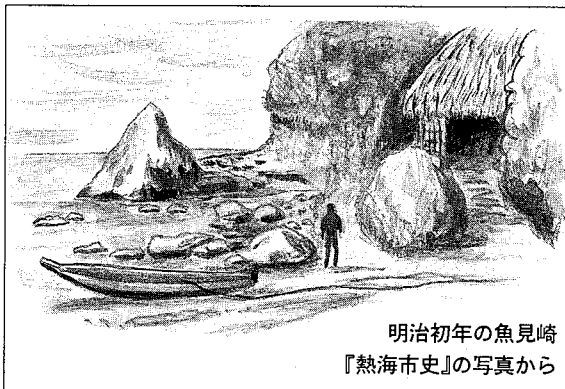
また、

あまならでまぐさかりたる賤(しず)の男に魚見をとうは道ちがうらん(漁師ならぬ草刈る男に魚見の道をきくのは方法がまちがっているのではないか)

磯山を三、四丁上りて魚見といえ

る岡あり。この岡の上に休茶屋二軒ありて望遠鏡など据えたり。北を望めば熱海の市街、海岸よりはるかに浦賀あたりまで一目に見えたり。東を望めば上総・安房(千葉県)かすかに海上にうかべり。南を望めば網代浦見ゆ。(続)

別註 8 片岡健吉。一八四三年(一九〇三年。高知の人で、戊辰戦争に板垣退助とともに参加。高知立志社を起し、板垣と民選議院設立の建白を行った。一八八五年受洗。信仰あつきキリスト教徒となる。衆議院議長。同志社社長)



明治初年の魚見崎 『熱海市史』の写真から

どと同様に慣用です。

う 間違ひありません。筆跡を辿ってみて下さい。かなり画が省略されていま

じっしようにござさう

す。特に候を書いてから座のたれの左に・を打っていますが、これも意味があります。

利息も

りそくをくわえ

雑誌紹介

このたび、同人雑誌『時空』第二号が発行された。発行者は鈴木一正氏で、氏は本会の会員でもある。

A5版六四ページ。年一回の発行。小型ながら盛り沢山の特色ある内容となっている。小田原に関連があるものとしては、鈴木氏の透谷研究文献目録で、平成四年一月より十二月の間に発行された単行本の他に雑誌、新聞に掲載されたものをも収録している。

△座談会▽文壇民俗学

①「文芸時評 井口 時男 について」 小笠原賢二

②丸山才一論 富岡幸一郎 山崎行太郎 菊田 均

△小説▽磯湖に遺されて 篠原 敦子

△人物論▽戦無派の昭和史 近衛秀麿② 菊田 均

△資料▽最近における透谷研究文献目録② 平成四年 一月～十二月 鈴木一正

△資料▽武田泰淳参考文献目録 平成二年～四年 鈴木 一正

「発行所」〒233横浜市港南 如來寺跡地の発掘・整備

岩江漁場鮎網事始願末 桜井 光夫

真鶴の年中行事考 青木 隆一

江戶期の真鶴は大規模村 中路 脩平

大室山と朝倉清兵衛 湯本 満

真鶴町郷土を知る会発行 真鶴町岩(六)桜井方 電(四五)(六八)一五五 B5五九頁 年會費 三千円

一緒に添えて。ヲ加への判読に苦しまれるでしょうが、この辺は金子借用証文の書式や慣用句に慣れる事で解決します。頭を抱えて投げ出さず気長に構えることです。

区六一十一一九一四〇四 鈴木一正方「時空の会」 定価五百円 千二百〇円

小田原市出身の

吉目木晴彦氏芥川賞受賞

このたびの芥川賞には、吉目木晴彦氏(三歳)の「寂寥郊野」が選ばれた。その内容は、戦争花嫁として渡米したが、アルツハイマー病の進行で人格が崩れていく日本人の老婦人の運命を描いた作品である。選

考委員は、その力量と構成力を高く評価している。早速、お祝いの便りをすると、当の吉目木氏は「受賞は時の運、と思います。しかし、文学そのものは運とは言えないので、むしろ今後、私の書いた作品が生き残れるか、真の価値はそこで図られると思います。

まだ多少身辺がザワついていますが、早く元のペー

スに戻り、次の作品にかかりたいと、そ

ればかり考えています」と、いう謙虚な言葉が戻ってきた。

なお、吉目木氏の芥川賞受賞は、氏が小田原出身ということで、文芸に関心を寄せる人たちの間で大いに話題となったようだが、氏は、本町小学校一年生を終了した、昭和三十九年春には、転出している。

なお、吉目木晴彦は本名がペンネームである。

(一五五)

嘉永四 辛亥年六月

西大友村

組頭 藤兵衛

同 幸右衛門

同 半内

同 友七

同 長右衛門

原治郎左衛門殿

中里村



寂寥郊野

吉目木晴彦

芥川賞

「芥川賞」が栄冠を手にした。 昭和四十年十一月一日

文芸春秋社

紅蓮洞・坂本易徳 とその時代

⑮

岡部 忠 夫

前号で主題の「紅蓮洞・坂本易徳」とは、直接関係ない人を取りあげ、唐突な感じであったが、坂本易徳と同時代に生きた、小田原・足柄地方の人をも併せて触れたいので、もう少しお許しを頂きたい。

坂本易徳と同時代の人
関重忠とその父重磨

関重忠の家録は百五十石で、小田原藩中では、中級の階層に属する。

重忠の名は、祖先の畠山重忠を踏襲したものである。文久元年(一八六一)十一月十二日の生れで、慶応二年(一八六六)九月生れの坂本易徳より五歳年上である。

坂本易徳が放浪生活で貧窮のうちに死んでいったのに比べ、関重忠は栄光の生涯を生きた人だ。

関重忠は、海軍少将で退役。関少将といえは、名士として小田原では誰しらぬ

者はいなかった。

他界したのは、日本海軍の主力は既に潰え、敗色濃い戦争末期の昭和二十年(一九四五)年三月十二日であるが、最後まで小田原市民の敬意を受け、その栄誉を保った人である。

※

ここでちょっと、重忠の父重磨が遺した『六十夢路』(美濃判)について紹介しておきたい。

その内容は、関家の家譜略や家庭教育などが載っているが、その部分よりは、「米艦初メテ江戸海ニ入ル江戸及下田出張」「本藩新古ノ夢」「文久三在京記」「元治元再ヒ在京ノ記」「戊辰国難記」といった、幕末動乱の事件が多く記録に留められていて、史料的价值が高い。

これらは、片岡永左衛門の『明治小田原町誌』や中野敬次郎先生の『小田原近

代百年史』に引用されている。

が、それだけではない。文倉平次郎書の『幕末軍艦威臨丸』(昭和十三年五月刊)にも、「戊辰国難記」の一部が引用されている。

それは、脱藩して榎本武揚の軍の許に身を投じた重磨が台風のため難航する威臨丸での苦難を記す内容である。この文倉の著書が、今年六月「中公文庫」として再刻されたとき、その末尾に作者並びに家族を知っている人は、発行元に連絡してほしいと呼びかけるほど著者は無名の人であった。

解題にあたった司馬遼太郎氏が「精緻ないわば原典に近い名著」と讃えているのを付け加えておこう。

ところで重忠は、『六十夢路』の前書きの終りに、「大正十四年、知人ノ依頼ニ応ジ父ノ遺稿ヲ示スニ際シ茲ニ之ヲ叙ス」と認めている。

『六十夢路』の閲覧を求めたのは、片岡永左衛門なのか、それとも文倉平次郎であろうか。もともとそのあと先を詮索することは無益であるが、中野先生でないことは、はっきりし

ている。

その和綴じの装丁は、閲覧に供するに当ってなされたものであろう。

装丁は、仕上り具合からすると、専門の業者によるものではなさそうであるが、素人にしては中なかの出来栄である。

ことによると、重忠が手がけたかもしれない。彼は、その頃満六十歳に達している。人によっては細かい手先仕事など厭う年齢でもある。

しかし、八十五歳の長寿を保った人だ。装丁も気軽にこなす器用さを持っていた。退役後もキャビネの大型写真機を担いで撮影するほどの体力を持ち合せ、自分で現像するほどの手まめさがあった。

彼の写真技術のことは後で記そう。さて、重忠は『六十夢路』の前書で、祖父と父のことを記している。簡潔で要を得ている。

余が祖父名ヲ小左衛門美章ト云フ目付、足軽頭、郡奉行ヲ経テ御用人ニ至リシガ戊辰国難ノ際力ヲ佐幕ニ尽セ

シ故ヲ以テ江戸ニ拘禁セラル。後死罪一等ヲ減シ永替居仰付ケラレ

終ニ特赦ニ遇フ。祖母ハ文政年間親ノ仇ヲ討チシヲ以テ有名ナル小

田原士浅田兄弟ノ妹ナリ余ガ父ハ美章ノ長男トシテ天保七年九月ヲ以テ生ル。初メノ名ハ一騰后重磨ト改ム。旧

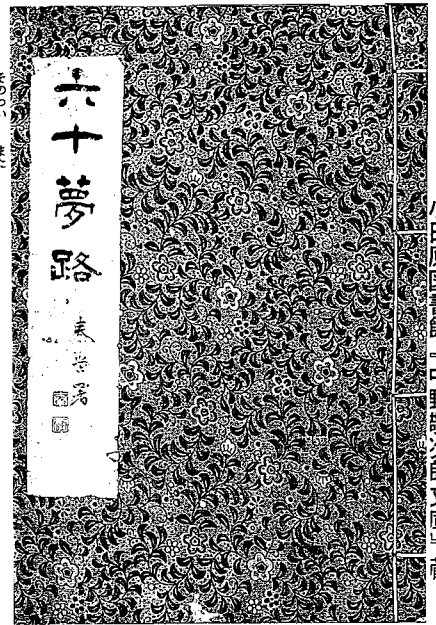
藩時代ニ在リテ近習又軍事掛タリ。戊辰ノ国難ニ際シ江戸ニ在リ藩籍ヲ脱シ徳川氏ノ海軍ニ入ル。品海抜錨ノ後颯風ニ遭遇シ万死ニ一生ヲ得再ビ江戸ニ入り

十月遂ニ帰籍ス。慶應後足柄縣ニ。明治十一年鹿兒島縣ニ奉職シ后チ茨城縣北相馬郡長ニ任セラレ。同十五年神奈川縣足柄下郡長ニ轉任ス。同十九年職ヲ辞シ隱居ス。爾來郷里ニ在リテ風月ヲ友トシ或ハ園藝漁獵ニ或ハ囲碁謡曲ニ日ヲ送リシモ

一方ニハ小田原町発展上ニ付種々画策セシトコロアリ。明治三十七年病床ニ就ク。療養手ヲ尽セシモ其効ナク同七月十三日遂ニ永眠セ

シ

小田原図書館「中野敬次郎文庫」蔵



リ 其卒ニ復起ツベカラザルヲ知ルヤ親友岡本隆徳氏ニ墓石ノ揮毫ヲ請ヒ 自ラ寺僧ヲ招キ埋葬等ニツキテ協議シ 又葬儀舎ヲ召ビテ棺ノ寸法等ヲ命ズ 瞑目数日前左ノ辞世ヲ詠ズ

四の望を断
おもひきやかかねて願ひの夢さめてかへらぬ旅に月を見んとは

待ちに待ちし望みも露と消果てし山路にひと月を見るかな

関重鷹の名は『明治維新人名辞典』(昭和癸年吉川好文館)に載る。人名辞典に収録されるのは、その人に

事跡があつてのこと、その点でなんといつても、彼が『六十夢路』の記録を残しているのが役立っている。関家では先年、火災に遭い先祖書や古文書を焼いてしまつている。『六十夢路』は、中野先生が所蔵されていたため幸い残つた。

それに、中野先生が前記『小田原近代百年史』の中に、「逸事多き関重忠」と題して、いくつかのエピソードを残されておられる。また、重忠の長男関重広工学博士(故人)が、「僕が書き残さなかつたらもう祖先や多数の親戚関係などほとんど分からなくなつてしまふだろう」と、過去帳や歴史書を調べ史家の話を聞くなどして

『わが家の歴史』にまとめられ、『小田原近代百年史』の関重忠の経歴について、補述されている。このようなことから、関重忠については、あらましの事が分かつている。

一陽来復して、明治十五年(一八八二)に父重鷹が足柄下郡長に栄進したときは、彼「重忠」も既に海軍機関学校在学中で秀才として将来を嘱目せられつつ翌十六年首席で卒業して直ちにイギリスに留学を命ぜられたのである。〔小田原近代百年史〕

明治四年(一八七二)十一月十三日、四カ月前廃藩置県で発足したばかりの小田原県が廃され、相模のほかに新たに伊豆を加えた足柄県が置かれることになった。

維新政府は、足柄県の最高責任者として、葦山県大参事柏木忠俊を参事(のち県令となる)に任命した。

柏木は、葦山の代官江川太郎左衛門の元締手代として、江川代官家を切り回してきた。彼は武士ではないが藩に引きうつすと筆頭家

老に該当する。柏木が最初に仕えたのは英龍(担庵)で、太郎左衛門は世襲号である。江川家を全国的に有名なにしたのは、英龍である。彼は農兵策や国防策を幕府に建言、嘉永六年(一八三三)、ペリー来航に際し勘定吟味役格に登用され、海防係として国事に参画した。品川沖の台場築造や、葦山の反射炉の設置など有名である。また、民生に意を用い、管内農民から「世直し江川大明神」の旗をたてられるほど、代官として優れた手腕を發揮し、幕府内では開明派官僚として重きをなすに至つたが、安政二年(一八五五)五十五歳で江戸本所の屋敷で没した。

英龍亡きあと、その子英敏が代官をついだ。柏木は英敏に英龍の遺業を継承させることになるが、英敏は七年後の文久二年(一八六二)に死んだ。その跡をさらに弟の英武が継ぐことになった。柏木は、二回も若き当主を支えることになったのである。

慶応四年(明治元年)の戊辰戦争に際して、柏木は手ぬかりなく、江川代官家を新政府に服属することを決めている。

維新政府が、柏木忠俊を葦山県からさらに足柄県のトップに据えたのも、柏木が、東征軍の働きかけに応じ、ためらうことなく新政府側についた、その動きを多としてのことと思われる。勿論、彼の行政的手腕も期待してのことであろう。前に記したことがあるが、

廃藩置県後置いた小田原県を四カ月後には廃し、足柄県を設けたのは、小田原藩が一時新政府軍に抗した懲罰的な行政措置という見方がある。

時代は、もっと後のことになるが、大正八年(一九一九)元宮内大臣の田中光顕は、次の旧藩各家の爵位を旧封の石高に應じた陞叙(のぼせる)を建言したと小田原有信会の記録の中にある。

仙台藩 六十二万五千石余	伯爵を侯爵に
会津藩 二十八万石	伯爵を侯爵に
南部藩 二十万石	子爵を侯爵に
小田原藩 十二万二千石余	伯爵を伯爵に
桑名藩 十一万石	子爵を伯爵に

子爵を伯爵に
この建言は、どのような事情によってなされたのか分からない。

それにしても、各藩いずれも、戊辰戦争で政府軍に抵抗したか、一時的にしても、旧幕府軍に味方している。そのため、授爵に際しランクを落とされたという意識をもつ藩である。

昭和三年(一九二八)になると、小田原有信会は、宮内大臣宛、大久保家陞爵について請願書を出している。

その中には関重忠が総代の一人として名を連ねている。おそらく請願は、小田原に別荘があった田中光顕を通じて行われたのであろう。

請願に対する回答は、田中光顕を通じて「党事党利ノミ事トスル」と、あっさり片付けられている。

現時点からすれば、アナクロニズムも甚だしいが、当時は、爵位に対して特別な感応をもって受け容れられていた時代でもあった。

話を元に戻そう。

柏木忠俊は、足柄県内をうまく治めてゆくには、旧小田原藩士族の起用は欠くことは出来なかった。

だが、その採用は慎重に進められ、小田原藩時代人物考査が官員だけでなしに名主クラス迄も行われていて、明治四年(一八七二)十二月の「内閣書」が残っている(『小田原市史』史料編近代一)。

その個々については、『小田原市史』を見ていただくとして、足柄県が発足して十日後の十一月二十三日、柏木参事は、足柄県から四名、東京府から二名、あとは、静岡県、茨城県から各一名、計八名を足柄県官員に任命している。

足柄県四名のうち一人は十等出仕の永原俊章で、小田原藩大属から引き続きの、勤めである。永原は、明治五年八月には九等出仕で文部省に出ている。現在、小田原市史編纂専門委員で古代・中世担当の永原慶二教授は俊章の孫に当たる方と思われる。

足柄県のと三名のうち二名は、旧荻野山中藩士。残りの一名は、足柄県下平民河野儀国(通称政太郎)で十二等出仕とあり、明治五年八月司法省に転じている。

翌五年(一八七三)一月二十

八日となると柏木参事は、足柄県士族十四名を足柄県官員に任用している。関重麿を除いては、小田原藩時代から引続いての勤めである。

小田原藩時代の八十六名の数から較べると大幅の減員となる。なお、明治五年十二月の判任官以上の足柄県官員数は四十三名が数えられる。この数は、定数枠いっぱいかどうか分からないが、その定めは勿論、維新政府の命令によるものである。

小田原藩時代、形式上、太政官辞令により任命されたと思われる、大参事の久保忠重や権大参事の石原重庸は、足柄県辞令による九等出仕の判任官であった。大久保忠重の家録は千石で、幕末家老を勤めているが、足柄県官員に任用されてから五ヵ月余のちの六月には辞表を出している。下つとりでいるのを潔しとしなかつたのであろうか……。

ところで、かつて小田原藩内の少壮佐幕派に属した重麿の起用は、柏木参事が人事の微妙なバランスを考えてのことであろう。それに、柏木は、佐幕派の中に人材がいることを知っ

ていたのに違いない。時代は人物を必要とした。時代は佐幕派を容認する雰囲気となっていた。

以前、重麿が身を投じた旧幕府海軍の重鎮榎本武揚が特赦され開拓使四等出仕となったのは、明治五年で重麿が足柄県に出仕した同年である。榎本は、二年後の明治七年海軍中將に任命され、特命全権公使としてロシアに赴任、千島樺太交換条約を締結している。

なお、官員中には北村透谷の父快蔵の名がある。

快蔵のその履歴は、『透谷全集』第三集(岩波書店)の年譜とはくい違いがあるので、『神奈川県史料』第九巻から引用しておきたい。

北村快蔵 実名武広天保十三年庚午閏十月十八日(明治三年) 倉長申付候事 小田原藩
辛未三月廿日(明治四年) 依願舎長差免候事 小田原藩

同年七月廿五日 海軍兵学寮十五等出仕 申付候事 兵部省

同年十月三日 任海軍兵学少属 兵部省

壬申四月十七日(明治五年) 任兵学小属 海軍省

同年八月三日 当県十二等出仕申付候事 足柄県

同年同月十二日 任足柄県少属 足柄県

同七年二月九日 依願免本官 足柄県
〔註〕『透谷全集』年譜には、快蔵は明治六年大蔵省出仕とある。

快蔵は、明治十一年(一八六六)、父玄快が、中風に倒れたため、大蔵省をやめ、小田原に戻り、足柄上郡々役所上席書記となり、関本(のち松田)に通勤した。

ところが、明治十四年(一八八二)、快蔵は再び上京、元の職場の大蔵省記録局に戻った。しかし、明治十九年から二十年頃、家族と離れて水戸裁判所の書記となっている。

以上のような快蔵の経歴を見ると、同じ官員畑にあって、自らの希望によって(おそらくそうであろう)、勤め先を変え転々とするのは、父が中風で倒れるという事情が一時あったにしても、職漁りとも見られないこともない。

しかし、快蔵にとっては自分の気持ちに忠実な行動

であつたらう。

新政府が官吏養成のため設立した昌平学校、後の東京大学を卒業した快蔵にとつては、自分の納得するものを求めていたに違いない。裏返せば常に現状に満足できなかつたともいえよう。透谷には、快蔵のこのような氣質がうけつがれてい

たものであろうか……。

ところで、足柄県の人事について、『新聞雑誌』(第七十六号 明治六年二月刊)の記事が面白い。それは、『小田原市史』史料編近代Iに収録されているが、その所蔵者が柏木忠俊の子孫であるのも興味

深い。

或人ノ投書ニ、豆相兩州ヲ合併シ、更ニ足柄県ト改称シ、権令参事ヲ始メ百僚既ニ備ルト雖トモ、貫属(本籍・原籍)人ノ情態ヲ知ズ、我輩開化進歩ノ域ニ住ム盲目虫ニテ、此ムシ

至テ佞諛(へつらい)ヲ嫌ヒ、今小声ヲ発シ各君ノ耳目ヲ借テ、見聞セシコトヲ此ニ顯ハス、夫レ足柄県下ノ人員ヲ検査スレバ多クハ小田原旧管ニ属セリ、然ルニ其撰挙採用ノ人ハ大抵葦山族ニ係レリ、故ニ一般ノ貫属内ニ哀

あり、わたしの観察は千葉県の暖帯林と丹沢の温帯林である。したがって、太平洋側では温帯林にも暖帯林にも分布していたことは確かである。日本海側では本当に暖帯林には分布しないのか、太平洋側では千葉以北になぜ分布しないのか疑問が多い。

丹沢の植物

⑰

城川四郎

日本の野生ランの仲間は、開発や植林によって、その生育環境がそこなわれ、さらに山草ブームに便乗した業者や、心ない山草愛好家たちの乱獲によって、徹底

的に痛めつけられた。首都圏に近い丹沢や箱根では特にその影響が著しい。もともと個体数の少ない種類が多いので、ほとんど絶滅状態になったものもある。

ここに紹介するナツエビネもその例の一つである。よく知られている近縁のエビネは、里山にも豊富に分布していたが、今ではそれもめっきり少なくなった。それに比べ、ナツエビネは以前からはるかに稀で、近年はいよいよ稀少になった。文献によれば全国的には、

日本海側では青森県以南の温帯林に、太平洋側では千葉県以南の暖帯林の落葉樹林内の林床に生えるという。神奈川県内では、横須賀・津久井・塔ヶ岳(丹沢)・神山(箱根)などに記録が

ナツエビネ (らん科)

Calanthe reflexa Maxim.



筆者原図

日本海側では青森県以南の温帯林に、太平洋側では千葉県以南の暖帯林の落葉樹林内の林床に生えるという。神奈川県内では、横須賀・津久井・塔ヶ岳(丹沢)・神山(箱根)などに記録が

あり、わたしの観察は千葉県の暖帯林と丹沢の温帯林である。したがって、太平洋側では温帯林にも暖帯林にも分布していたことは確かである。日本海側では本当に暖帯林には分布しないのか、太平洋側では千葉以北になぜ分布しないのか疑問が多い。

怒ヲ含ムト雖トモ、疲弊ノ余恰モ杉箸ヲ以テ大石ヲ打ガ如クニテ、建言公論スルコト能ハス、同県官員某ハ兼テ三大將ト名ヲ得タル程ト聞ケリ、其人等平日ノ見込奈何ニヤ

(続)



開票結果

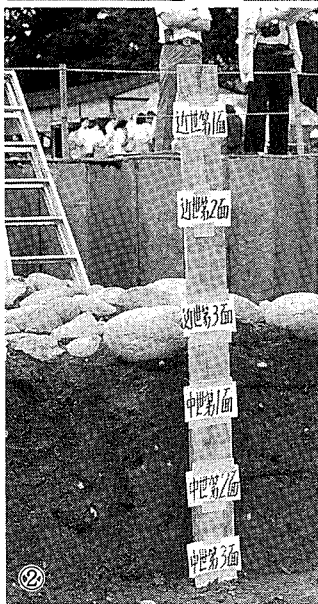
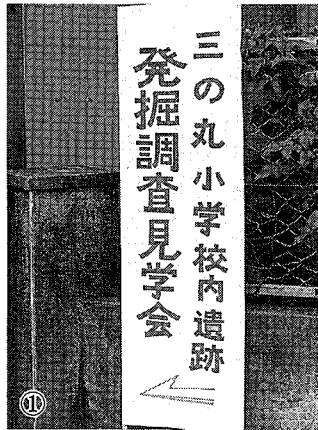
五区 平塚市 秦野市 南足柄市 小田原市 厚木市 伊勢原市 足柄上郡 中部 足柄下郡 愛甲郡

- (定数) 三 投票率 三・七%
- 当一三、〇五 河野洋平 56 自前
- 等二九、〇九 小泉新一 45 日新
- 当一六、〇九 亀井善之 57 自前
- 一〇、三三 富塚三夫 64 社前
- 三三、八三 熊田和武 53 共新

落穂集


◎去る八月二十日、氣象庁は、低温、豪雨、日照不足と例年にはみられない不順な天候に見舞われた今年の夏は、一九五四年ぶりの冷夏であると発表。偏西風の大きな蛇行が主因で、またエルニーニョ現象の発生も影響があるという。さらに、氣象庁は八月三十一日、今年の梅雨明けは、沖縄と奄美地方を除く九州から東北地方では、明らかな境目のないまま季節が進んだため梅雨明けの日が特定できないと、梅雨明け宣言を見直すと発表した。氣象庁がこの宣言をするようになった一九五一年以来初めてのことだという。今年夏らしい夏もない異常気象で、米を始め野菜、果物の農作物への影響は大で、不景気の回復を遅らせる一因であると考えられている。それにしても、昭和初頭頃、恐慌、東北地方の凶作、娘の身売りといったことがあった。これら一連の出来事は、「昭和維新」を標榜した血気一途の青年将校たちが引き起こした五・一五事件に

結びついている。しかし、二度と軍国主義の道を歩むことはまず考えられない。敗戦という高い授業料を払い、また、当時の社会的基盤や時代の空気が変わった。ところで、次のような対話がかかっては使われたことがある。「土用布子(綿入れ)に寒帷子(暑いときに着る単衣)」暑い盛りの土用に布子を着て、寒の最中に帷子を着るという意が転じて物事の順序が逆になる譬である。今年はまだに異常気象の年である。ついでながら、彼岸を前にしての九月十八日午前中三十度を超える真夏日の温度を記録した。それでも、庭の彼岸花は季節通りに彼岸入りの日に咲いてくれた。これからの気象回復に期待したいのだが…。◎去る八月七日(出)、元小田原城三の丸・藩校集成館の発掘現場で市民を対象にした説明会が開かれた。旧本町小学校があったこの場所は、昨年本町小と城内小が合併、新たに三の丸小学校(現在城内小の校舎を利用)として発足したことに伴い



発掘の地層年代

三の丸小学校内遺跡 発掘調査見学会



祐経の恨みは闇の虎ケ雨
今年一九九三年は曾我兄弟の仇討から八百年にあたる。
闇の中の豪雨でなければ真逆討たれもしなかったろうにと工藤祐経は恨んだことであろう。虎ケ雨とは十郎が愛して通った大磯の遊女虎御前の名をとった俳句の季語。夜討のあった五月末頃に降る雨のことを言ふ。
洋傘でなくてよかったネと五郎言ひ
曾我夜討では松明のかわりに傘を燃やしたといふ伝承があり、そこで今では曾我城前寺における傘焼が年中行事になっている。しかしその当時の雨具は蓑笠が主で一般に傘が普及していたかどうか疑問である。
さるにても十八年の遺恨とは
十郎五歳五郎三歳の幼児が、十八年の永きにわたって父の仇祐経をねらったとは素直には考えられない。そこには兄弟を後押しする幕府内部将の政治的カラクリが見え隠れするのである。
十郎は六本松まで駆足で
大磯の虎御前を愛した十郎祐成は、下曾我家から逸る心を押さえかねて駆足で峠の六本松へ上がり、そこから大磯までまっしぐらに。惚れて通へば千里も近い。
虎御前双子山では大威張り
虎御前は元来曾我兄弟物語りの副次的人物で隠れた存在なのだが、箱根双子山山麓に在る慰霊碑には兄弟と並んで、そのヒロイン振りを見せている。

誤	正	誤	正
P20 1段 6行 方葉仮名	→ 変体仮名	P22 " 26行 その頃	→ 社史が発行された頃
" 2段 7行 日(休)の五日間	→ 日(月)の五日間	P26 1段 6行 小田原開成	→ 小田原開城
P22 5段 11行 伝記と書いた	→ 伝記を書いた		

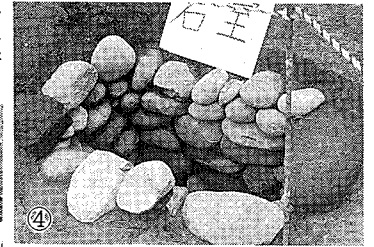
新校舎が建設される。

説明風景

石室

出土品・明染付

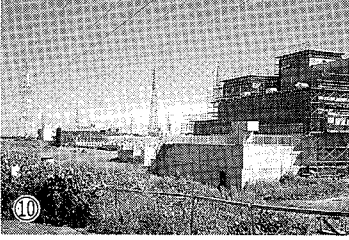
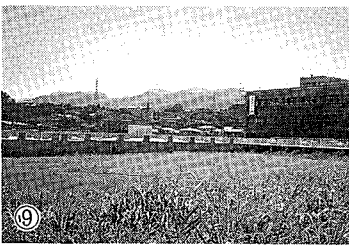
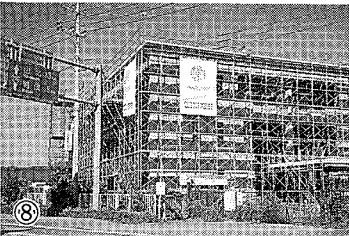
建設に先立ち、今年一月から(株)玉川文化財研究所が取り壊した本町小校舎跡地の発掘調査を続けている。これ迄の調査で、城郭図にない堀跡が発掘された。これは、慶長十九年(一六四)



小田原北条時代井戸

隣の改易により、徳川家康より破却を命じられた堀と推定されている。その他主なものとして、小田原北条時代の井戸、石室、土杭溝や江戸時代の堀、砂利敷面、石列、石垣積水路、礎石などが挙げられる。井戸は素掘りのものと、上部に玉石が積まれたもの、二基が確認され、中国明時代の磁器や瀬戸の陶器、漆椀などが出土した。

(写真①)~(⑥)



小田原北条時代井戸

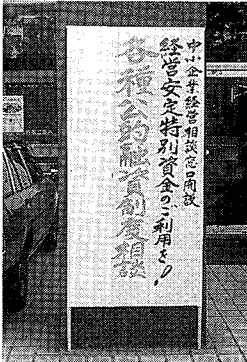
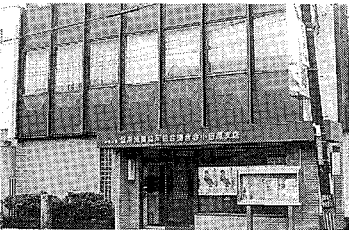
◎小田原市扇町六丁目の狩川右岸広さ約六・七ヘクタールの地に「酒匂川流域下水道右岸処理場」工事が県の手で平成八年度完成を目標に進められている。出来あがると、小田原市の一部、南足柄市、開成町、山北町の一部の人たちが利用できることになる。

(写真⑦)~(⑩)

◎野猿が片浦から久野、さらには南足柄市に横行して農家は困っている。その元は人間が餌付けして猿をふやしたためだ。

小田原商工会議前の立看板

バブル崩壊 4月1日閉鎖の信漁連小田原支店(千度小路)



会員消息

◎鐘紡(株)小田原工場(小田原市寿町五丁三二八本会特別賛助会員)は、前々から工場の緑化に取り組んできているが、その環境美化が社員へ安らぎを与え、また地域社会へ潤いをもたらしていると高く評価され、去る七月三十一日、内閣総理大臣賞を受賞した。
◎鈴木富美子さん(東京都西多摩郡五日市町、旧姓小峯)前号の巻頭文を読んで次のような感想をよせられた。

「小田原城跡二の丸の第二(城内)小学校、小田原高女と通学して居りましたので昔が思い出されます。学橋住吉橋(すみ橋の所)をわたって、長いこと大木に囲われて遊んだ日々がなつかしく(もとは皇室林野局)とても子供にはよいところでした。女学校には太鼓橋もありました。冠木門は同窓会で作り正門としました。
◎富田千春氏(小田原市千代)は、千代の廃寺(国分寺)の鬼瓦を所蔵されているところから、先年、奈良国立博物館の国分寺展で、鬼瓦の出品をされたが、今回は去る九月一日(木)から五日(木)迄、都下吉祥寺近鉄百貨店東京店で開催の「弓削道鏡資料展」に共催者の「道鏡を知る会」に「道鏡を守る会」から要請を受け千代廃寺と道鏡と関係があるとの事で鬼瓦を出品された。
◎加藤水虹氏(小田原市栄町二丁目あいそめや夢工房)は、第三回藍工房作品展を去る九月八日(木)から十三日(月)の間アオキ画廊で開催された。水虹氏の他、工房教室の人達の作品は回を重ねるごとに生彩を加えている。

お詫び 153号の訂正

誤 正
P 5 3段 23行 関東一体 → 関東一帯
" 5段 10行 エピソード → エピソード

誤 正
P 6 1段 8行 十文字 → 十文字
" 2段 5行 針金 → 針金
P 16 1段 12行 仲哀天皇 → 仲哀天皇

